

令和
7年度

作文コンクール

入賞 作品 集

令和
7年度

未来を創造する建設産業

私たちの主張

届けよう建設産業への
熱い想い!

応募期間
令和7年 5/8^{Thu} ~ 6/30^{Mon}

主催/国土交通省、建設産業人材確保・育成推進協議会

未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール
建設産業で働く方の作品

建設産業への
想い

令和7年度
高校生の
作文コンクール

応募期間
令和7年 5月8日^木 ~ 6月30日^月

主催/国土交通省、建設産業人材確保・育成推進協議会

高校生の作文コンクール
高校生の作品

建設産業人材確保・育成推進協議会

作文コンクール入賞作品集

選定結果

建設産業で働く方の作品P3

(未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール)



国土交通大臣賞

寺田昌司 (株) 香山組 兵庫県 「こうじげんばのひと」 P4



不動産・建設経済局長賞

稲垣浩助 (株) 深松組 宮城県 「選ばれる建設業になるために」 P5

高橋駿太 (株) 丸本組 宮城県 「私たちがいれば大丈夫」 P6

細部愛子 ユナイテッド計画(株) 秋田県 「誰かの朝を作る仕事」 P7



優秀賞

吉野結香 (株) 橋本店 宮城県 「建設業の現場で学んだこと」 P8

本間麻衣 (株) 本間組 新潟県 「だれかのいのちを守る仕事」 P9

蒲原裕也 (株) 香山組 兵庫県 「偏見を超えて～建設業界が描く明日の社会～」 P10

中川蓮 (株) 中川建材 兵庫県 「懸け橋になるということ 一過去と未来をつなぐ建設という生き方」 P11

岸本紗也加 唐津土建工業(株) 佐賀県 「建設ディレクターを憧れに」 P12

高校生の作品 P13

(高校生の作文コンクール)



国土交通大臣賞

荒木悠迅 金沢市立工業高等学校 土木科 2年 「人を笑顔にする職業」 P14

四宮渚咲 徳島県立阿南光高等学校 都市環境システム科 2年 「あの神社からはじまったこと」 P15



不動産・建設経済局長賞

伊藤颯太 千葉県立京葉工業高等学校 建設科 3年 「目の当たりにした土砂災害が教えたもの」 P16

大田恵隆 金沢市立工業高等学校 土木科 3年 「ダムに魅せられて 一土木の道へ進む決意」 P17

水野月 静岡県立天竜高等学校 総合学科 建築系列 2年 「祖父から受け継ぐ「丁寧」が支える暮らし」 P18

糸万葉 愛知県立愛知総合工科高等学校 建設科 3年 「コミュニケーションが架ける橋」 P19

伊井直太郎 鹿児島県立鹿児島工業高等学校 建設技術系 2年 「強い大人」 P20



優秀賞

北嶋航成 北海道函館工業高等学校 環境土木科 3年 「自分らしい道へ」 P21

熱海心琉 宮城県古川工業高等学校 建築科 2年 「安らぎを紡ぐ建築の力」 P22

鯉沼凜風 栃木県立宇都宮工業高等学校 建築デザイン科 2年 「幸せを造る仕事」 P23

石井彰翔 千葉県立京葉工業高等学校 建設科 3年 「感謝してもしきれない」 P24

西田潤 金沢市立工業高等学校 土木科 2年 「たくましい存在」 P25

岩崎柊磨 静岡県立天竜高等学校 総合学科 建築系列 2年 「暮らしを「変える」建築: 最新技術と私の創造で描く未来図」 P26

植田真綺 静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年 「家族と紡いだ暮らしのカタチ」 P27

小林美心 静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年 「私の描く未来-人と人をつなげる建築のかたち」 P28

齋藤光志 静岡県立浜松工業高等学校 建築科 1年 「建築で歴史に感動を刻む」 P29

鈴木希彩 静岡県立浜松工業高等学校 建築科 1年 「インテリアが日常を特別にする」 P30

橋美優 愛媛県立松山工業高等学校 土木科 3年 「感謝の恩返し」 P31

龍絢菜 福岡県立八女工業高等学校 土木科 2年 「私が思う夢や目標」 P32

岡本ひかる 熊本県立熊本工業高等学校 建築科 1年 「暮らしと心をつなぐ建築」 P33

受賞作品の講評

運営委員長 古阪秀三

この作文コンクールは建設産業で働く皆さんからの「私たちの主張」と高校生の皆さんからの「高校生の作文コンクール」の2つの部門で成り立っています。

「私たちの主張」は、建設産業で働く方々の思いであり、今年で18回目となります。今年のテーマは「未来を築く『こどもたち』に伝えたい建設産業の魅力」又は「建設産業の役割と未来」で、全国から452作品の応募がありました。最少年齢は18歳、最高年齢は70歳でした。また、女性の応募が今年は18.4%でした。さらに、30歳未満の若者の応募が約69%、一方では、仕事の第一線を退かれる頃になる熟練の先輩の方々が若者に伝えておきたいという意欲を持って、「私たちの主張」をしてくださいました。応募して下さった452人の方々に心から敬意と謝意を表します。

今年、国土交通大臣賞に輝いた方は寺田昌司さんです。

寺田昌司さんは『こうじげんばのひと』と題して、鉄鋼メーカーから転職して建設業界に入った中での苦労の下、野球選手や看護師のごとく、建設現場の個々の技能者、技術者などをまとめて「こうじげんばのひと」ということで、仕事領域の分りやすさ、子供たちへの期待を込めるなど、全体として一般の人たちにわかりやすく書かれている。

不動産・建設経済局長賞には次の3人が選ばれました。

稲垣浩助さんは『選ばれる建設業になるために』。建設業における技術の進歩を感じながら、従来からの「地域の人との信頼」も大切に。さらに、これからの建設業界への提言。魅力的な業界への思い。まさに、これからの建設業界を担う活躍を!!

高橋駿太さんは『私たちがいれば大丈夫』。自分自身の業務経験から、明瞭かつ多角的に建設業の魅力を表現したことがよい。特に、小学校の改修工事の際に、小学生のために質問箱を設置したこと、それを軸とした子供たちの建設業への魅力／理解が進んだこと等。

細部愛子さんは、『誰かの朝を作る仕事』。「朝が来るための準備をしている人たち」として、除雪、災害対応など社会を支える情景を明らかにし、安全管理の重要性や女性活躍による建設産業の魅力を発信している。

一方、「高校生の作文コンクール」は、全国の高校の建築学科、土木学科等で勉強をする若者が建設産業に抱くイメージや夢を発表するもので、今年が13回目です。今年のテーマは「私が思う建設産業の魅力」又は「建設産業の未来と私の将来」で、全国から1040作品の応募がありました。また、その中で女の子の応募の割合が約22%となりました。応募して下さった1040人の若者の勇気をたたえ、また敬意と謝意を表します。

今年、国土交通大臣賞に輝いた方が2人いらっしゃいます。

まずは荒木悠迅さん。

荒木悠迅さんの作文は『人を笑顔にする職業』。能登半島地震の経験から道路の重要性に気付き、工業高校に進学を決意。祖母の家が被災した際には、建築技術で復旧可能、このようにして建設業の素晴らしさを実感。その結果、建設業に入って、能登の復興に取り組みたい。建設業を目指す動機がリアリティをもって伝わってくる。

2人目の大臣賞は四宮渚咲さん。

四宮渚咲さんの作文は『あの神社からはじまったこと』。幼い頃の神社の記憶、「うだつの町並み」など、古くからの建築物やその本質は今も変わらない。その一方で、最新のデジタル技術等を踏まえた現在の建設産業に、その先人の思いを受け継いでいこうという気持ち等がわいている。

不動産・建設経済局長賞には次の5人が選ばれました。

伊藤颯太さんは、『目の当たりにした土砂災害が教えたもの』。個々の文章が簡潔ながら、なぜ、建設産業に関心を持ったのか、魅力は何かといったことが親から、また、自身から湧き出て面白いことになっている。

大田恵瞳さんは、『ダムに魅せられてー土木の道へ進む決意ー』。私にとって、ダムはただの構造物ではなく、人生の目標を与えてくれたかけがえのない存在。将来は、日本や世界のインフラを支える土木技術者として活躍したい。なかなかの人生目標だ。

水野月さんは、『祖父から受け継ぐ「丁寧」が支える暮らし』。祖父の背中から学んだ丁寧さと、学びで得た正確さを胸に、人々の命と暮らしを守る建設産業の魅力を自分で体現する。これが私の進む道であり、私が思う建設産業の最大の魅力。見事なものである。

糸万葉さんは、『コミュニケーションが架ける橋』。「コミュニケーション」を通して建設産業の魅力を知り、建築学科に進学、「コミュニケーションを通して伝えること」こそが建設産業においてずっと変わらない不変の魅力とのこと。なるほど!!!

伊井直太郎さんは、『強い大人』。将来の夢である測量の仕事に就こうと思う決意とその仕事に対する責任を持ち、「強い大人」になりたいとの思いが伝わってくる。建設業に携わる人々たちへの憧れと尊敬の念が感じられる。

「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」の応募作品を読みながら、いつも感じるのですが、2つの部門とも、実際に経験したこと、観察したこと、家族・同僚・友達と話したこと、さらに将来への期待などが丁寧にかつわかり易く書かれています。それが契機となって建設産業で働くことになったという事例が多いことも納得です。すべてを公開して読んでいただくのがいいのではないかと印象を持っています。

その一方で、日本の建設産業の近未来の市場は相当な変革が求められます。伝統的なこと、技術的な継続性を大事にすることはいうまでもないのですが、その一方で、思い切った改善、革新等の活動も重要です。このような状況の下、素直に自分が感じたこと・考えたことが書けること、悩ましいこと・問題だと思ふことを文字で伝えられること、これらのことがいかに大切かを「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」を読みながら確信しました。これからも大いに文章を書きましょう。そして他者に伝えましょう。それらが建設産業の改善、働きがいのある産業へとつながることを期待したいと思います。



写真撮影：衣笠 名津美

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和7年度

未来を創造する建設産業

「私たちの主張」作文コンクール

■ 趣 旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、建設産業で働く方々の熱い想いを伝えていただくとともに、一般の方々に建設産業についての理解を深め、関心を高めていただくために作文コンクール「私たちの主張」を実施しています。

今コンクールは、平成20年度から実施し、今年度で18回目となりました。

■ 募集概要

- 応募資格 建設産業の仕事に従事している方
- 応募期間 令和7年5月8日(木)～6月30日(月)
- 応募テーマ 建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。
未来を築く「こどもたち」に伝えたい建設産業の魅力 又は 建設産業の役割と未来
- 応募総数 452作品

■ 作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]

<https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/result.html>

■ 選考委員

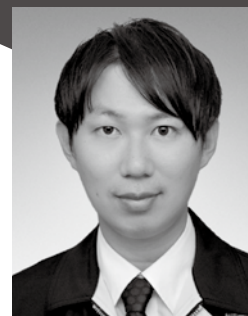
- 古 阪 秀 三 立命館大学 客員教授
建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
- 浦 江 真 人 東洋大学 教授
建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会副委員長
- 城 麻 実 国土交通省 不動産・建設経済局 建設振興課長
- 岩 野 剛 (一社)全国建設業協会 常任参与
- 樋 脇 毅 (公社)全国鉄筋工事業協会 常任理事
- 奥 地 正 敏 (一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事



国土交通大臣賞

こうじげんばのひと

てらだ まさし
寺田 昌司 [株式会社香山組 / 兵庫県]



「パパは工事現場でどんなお仕事をしているの?」6歳の息子からのストレートな質問に私は一瞬、言葉に詰まった。

私は「建設ディレクター」として工事書類を作成したり、三次元モデルを作ったり、現場技術者と協働して工事の進行を支援する仕事をしている。しかし、その仕事をどう伝えていいのかが、分からなかった。

建設業界に入職して4年が経つ。以前は鉄鋼メーカーで勤務をしていた私は、BIM/CIMモデルを作成するCADオペレーターの仕事に魅力を感じ、未経験のままコロナ禍真っ只中で転職を決意した。最初は右も左も分からず、毎日が手探りだった。それでも、三次元モデルを使った業務は、工事の内容を“見える化”できる特性があり、現場技術者とのコミュニケーションは取りやすかった。また、未経験だったからこそ「知らない人の目線」で、工事の目的や重要性をわかりやすく伝えることができたと思う。

この業界に入ってから、何人もの仲間が去っていく背中を見送ってきた。担い手不足や厳しい労働環境など、業界が抱える課題は少なくない。それでも私はこの仕事が好きだ。だからこそ、もっと多くの人に建設業の魅力を伝えていきたいと考えるようになった。

入社からちょうど1年が経つ頃、私は国土交通省が掲げる、デジタル技術を活用して工事の効率化を図る「インフラ分野のDX」の考えに共感し、「DX推進部を立ち上げたい」と会社に提案した。当時、業界経験の浅い私に対し、周囲の反応は冷ややかだったが、社長だけは「やってみましょう」と背中を押してくれた。

部を立ち上げてからは、工事の生産性向上に加えて、地域や子どもたちに工事の面白さを伝えることに力を入れた。作成したCIMモデルを活用して、普段一般の方が入れない現場をバーチャルで再現し、VRゴーグルをつけて体験してもらったり、夜のイベント会場では重機にイルミネーションを飾りつけて展示したり、近隣の保育園や小学校と一緒にクリスマスイベントも開催した。現場やイベントに来てくれた子どもたちが「工事現場っておもしろいね!」「また遊びに来てもいい?」と目を輝かせてくれた瞬間、私はこの取り組みの意義を確信した。

建設業は、何よりも「チームでつくる仕事」だ。施工管理、測量士、建設技能者、重機オペレーター、そして私のような建設ディレクター。それぞれが専門性を活かし、朝から日が暮れるまで一つの目標に向かってひた走る。そして完成した工事は「工事成績評定点」という形で評価され、良

かった点も悪かった点も工事期間のすべての努力がフィードバックとして返ってくる。どれだけ優秀なホームランバッターがいても、チームにキャッチャーもピッチャーもいなければ、試合には勝てない。現場で共に働くそれぞれの分野のスペシャリストが力を出し合い、多様な技術と情熱が集まり、一つの「ものづくり」が形になっていく。この「チームでつくる力」に私は心から魅力を感じている。

最近では、建設業に興味はあるが、現場での作業に不安を感じている人も多い。だからこそ、「自分にもできるかもしれない」という新たなキャリアの選択肢として、建設産業の多様な関わり方を発信していきたい。年齢や性別、経験の有無に関係なく、「やってみたい」という情熱があれば、誰だって活躍できる場がここにはある。

ある日、現場から直行して作業着のまま保育園に息子を迎えに行ったことがあった。普段の私は、他のお父さんたちに合わせてパリッとしたワイシャツを着ていたのだが、その日は園児たちが「すごい!工事現場の人だ!」と集まってきた。息子は誇らしげに私の隣に立っていた。汗臭く、お世辞にも綺麗とは言えない作業着の姿が、子どもたちの目には輝いて見えていたのだ。その時、私は気づいた。大人が思う「カッコいい」と、子どもたちが思う「カッコいい」は違うんだと。その日から、私は作業着のまま保育園に迎えに行くことをためらわなくなった。

野球選手やパティシエ、警察官、看護師。子どもたちの「将来になりたい職業」にはさまざまな夢が並ぶ。しかしその中に工事現場で働く仕事の名前はほとんど登場しない。なぜなら、これらの仕事にまだ統一された魅力的な呼び名が存在しないからだ。私は考えている。だから私はあえて「こうじげんばのひと」と呼びたい。大人が思う、カッコいい呼び名ではないかもしれない。それでも、子どもたちは自然とそう呼び、憧れの眼差しを向けてくれている。

私は、未来を担う子どもたちの「将来になりたい職業」に、「こうじげんばのひと」が当り前に並ぶような時代をつくりたい。建設業には、誰かの暮らしを支え、未来をつくる力がある。その素晴らしさを、幼い頃から子どもたちに伝えていきたい。将来の担い手は、今、目の前で遊んでいる子どもたちなのだから。

私はこれからも「こうじげんばのひと」として、建設業の魅力を伝え続けていく。

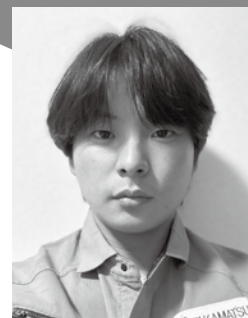


不動産・建設経済局長賞

選ばれる建設業になるために

いながき こうすけ

稲垣 浩助 [株式会社深松組 / 宮城県]



建設産業は、人々の暮らしの土台を支えている仕事だと思う。

電気や水道、道路、建物など、日々の生活に欠かせないインフラは、すべて建設の力によって成り立っている。そして、災害が起きたときには、誰よりも早く現場に入り、復旧作業にあたるのも建設業の役割だ。決して派手ではないかもしれないが、社会の根幹を支えているという実感を持てる、誇りある仕事だ。

自分は今、建設業界で働いて3年目になる。

1年目は、ICT施工を導入している現場に配属された。建設業に入る前は、「建設って、アナログな世界なんじゃないか」と思っていた。しかし、実際に現場に入ってみると、そのイメージは大きく覆された。モニターを見ながら数ミリ単位で施工精度を確認できたり、丁張を使わずに重機を動かして、綺麗に施工できたりと、効率も精度も非常に高かった。GNSSや3Dデータを活用することで、作業時間が短縮され、結果的に残業の削減にもつながっていた。何より、重機の操作や測量確認が直感的でわかりやすく、これから建設業に入ってくる若い世代にとっても、非常に入りやすい環境だと感じた。技術の進歩によって、建設業界は確実に変わり始めている。

2年目には、上杉の住宅街で下水管の更生工事を担当した。

住宅街という場所は、近隣住民との関わりが多く、最初は苦情もたくさんいただいた。たとえば、「誘導がわかりづらい」「通行止めの看板が見えない」「騒音が気になる」といった声があった。正直、初めての経験で戸惑いもあったが、現場の一員として、ひとつひとつ丁寧に対応していくしかなかった。工事内容を分かりやすく説明し、業務中きちんとあいさつをし、できる限り要望に応えるよう努めた。冬には自分から進んで雪かきを行い、看板の位置も何度も見直して改善を重ねた。

その結果、少しずつ「ご苦労さま」「寒い中ありがとう」といった声をかけてもらえるようになり、工事完了時には「工事、無事に終わってよかったね」と笑顔で声をかけてもらえた。とても嬉しかったし、建設の仕事はモノをつくるだけでなく、地域の人々との信頼関係によって成り立っているのだと、強く感じた。

ただ、業界全体を見渡すと、まだまだ課題は多いと感じる。

SNSやインターネット上では、「朝が早い」「きつい」「汚れる」「危ない」といったネガティブなイメージばかりが先

行し、現場で感じるやりがいや達成感は、なかなか伝わっていないのが現状だ。実際に、休憩が取りにくい日があったり、残業が続いたりすることもあるのは事実である。しかし、それだけではない魅力やおもしろさが、この業界には確かにある。

そうした前向きな側面が外に発信されていないことは、非常にもったいないと思う。この作文を通じて、少しでも建設業に対するイメージが変わり、興味を持ってもらえたら嬉しい。

これからの建設業界には、もっと「働きやすさ」を追求する取り組みが求められていると思う。

たとえば、週に1~2回だけでも15時終業日を設けるといった柔軟な勤務制度を導入することで、気持ちに余裕が生まれ、仕事への集中力やモチベーションにもつながるはずだ。特に、夏場の猛暑や冬の厳寒の中で長時間作業を続けるのは、体力的にも精神的にも非常に負担が大きい。

また、若手技術者の待遇改善も大きな課題の一つだ。責任ある現場を担っているのに、それに見合った評価が得られなければ、やる気を維持し続けるのは難しい。安心して働き続けられる環境づくりが、将来の担い手育成にもつながっていく。

とはいえ、こういった改革を一企業だけで進めるのには限界がある。

発注者や行政も巻き込み、業界全体として「変わろう」という空気を共有していくことが不可欠だと感じる。構造的な課題に対しては、業界横断的な取り組みが求められる。

建設の役割は、これからも変わらない。

人々の暮らしを守り、街をつくり、そして災害時には真先に現場に駆けつける。私は、そんな責任ある仕事に携わっていることに、誇りを持っている。

そして、建設業の未来を支えるためには、現場で働く自分たちが声を上げることが必要だと思う。

「もっとこうしたい」「こうすればもっと良くなる」といった想いを持ち寄り、発信していくこと。人と技術をつなぎながら、若い世代から「やってみたい」と思われる建設業をつくっていくこと。

それこそが、これからの時代にふさわしい建設産業の姿だと私は思う。現場の声にもっと耳を傾け、柔軟な発想を取り入れることで、この業界はさらに魅力的になっていくはずだ。



不動産・建設経済局長賞

私たちがいれば大丈夫

たかはし しゅん た

高橋 駿太 [株式会社丸本組 / 宮城県]



人と建物のつくりは似ている。骨が鉄筋、筋肉がコンクリート、皮膚が外壁と屋根、心臓が機械設備、脳が電気設備。強い骨と強い筋肉があるから人は丈夫になる。これは私が工事現場で小学生の子どもから学んだことである。それぞれには重要な役割があり、何か一つ欠けてしまえば正常に動くことはできない。私が施工管理をする上で意識していることの一つである。人が体の健康を管理する事と同じように建物の健康を管理する事が私の仕事だ。

数年前、私が小学校の改修工事を担当していた時の事です。施工管理者の私は工事を円滑に進める為の工夫として小学生に向けた質問箱を設置しました。当時はコロナウイルスが流行っていたため、直接的な交流を図ることができないことから質問箱を設置し、子どもたちとのコミュニケーションを図るとともに工事や建設業への興味を持ってもらいたいという目的がありました。設置した質問箱には予想以上に紙が多く入っており、興味を持ってくれていることがまず嬉しかった。質問の内容は子どもの純粋さ故に私にとっては深い質問がありました。「高いところは怖くないですか」「何の工事をしているのですか」「仕事は楽しいですか」「仕事への想いは何ですか」など、沢山の質問があり、教えるどころか私自身も考えさせられることがありました。その中でも特に記憶に残っている質問があります。

「どうして家は丈夫なのですか」

私は考えました。「建築基準法に基づいた安全性を確保した設計と精度の高い施工技術、ミリ単位での細かい品質管理を行っているから」そんなことが頭には浮かんだが専門的な言葉を並べても子どもたちには分かりづらく、興味をそそらないだろう。答えはたくさんあると思うが小学生の目線になり、子どもが分かりやすい表現での回答を考えた。そこで思いついたのが「建物と人のつくりは似ている」という事。強い骨と強い筋肉があるから丈夫な体(建物)になる。正確な答えにはなっていないかもしれないがイメージはしやすいと思った。もう少し具体的に例えるならば体を支える骨が鉄筋、体を動かすための筋肉がコンクリート、体を守る皮膚が外壁と屋根、空気や水分を

コントロールする心臓や血管が機械設備、各部位への信号を送る脳が電気設備といったところだろうか。それぞれには重要な役割があり、どれか一つでも欠けてしまえば正常に動くことはできない。人がケガや病気のないように体の健康管理する事と同じように建物のメンテナンスや維持管理をするのも私の仕事である。また、「建物が丈夫」であることが当たり前だと思っている子どもの考えをより確実なものにしたいと思いました。

丈夫な建物をつくる一番の理由は地震や台風、火災などの自然災害から人を守ることです。私が中学生の時に東日本大震災が発生し、地元は地震と津波の影響により甚大な被害を受けました。友達と遊んでいた場所や登下校で通っていた道、当たり前だった光景が一瞬で変わり果てたことに心身ともに衝撃を受けました。しかし、それから月日が経って当時の記憶が薄れてしまっているのも事実です。それは悪いことではなく建設業を中心とした復興事業が落ち着き、昔のような賑やかな光景、安心した暮らしが戻ってきた証拠でもあります。日本は地震の多い国で、近年でも地震や台風の影響で被害を受けている地域は多くあります。いつ何が起こるかわからない。当たり前が当たり前でなくなってしまうかもしれない。どうしたらいいのだろうか。そんなときに活躍するのが建設業で働く私たちだと思っています。今まで経験してきたことから学び、未来につなげる。地震や台風に負けない強く丈夫な建物をつくり、安心できる暮らしを守ることが私たちの仕事です。

私は思う。建物と人は似ている。つまり建物をつくるということは人をつくるということ。強い人、弱い人。強い建物、弱い建物。多様性の世の中、色々な人がいるように様々な建物がある。それぞれの良さ、魅力がある。建設業の中でも沢山の職種があってそれぞれに役割と魅力がある。そして人と建物が求めるものは「丈夫と安心」。安心な暮らしの陰には建設業で働く私たちがいます。目の前の当たりの光景、その笑顔を守るために。これまでもこれからも私たち建設業が支えます。

子どもたちへ「私たちがいれば大丈夫」



不動産・建設経済局長賞

誰かの朝を作る仕事

ほそ べ あい こ
細部 愛子 [ユナイテッド計画株式会社 / 秋田県]



建設業は「未来を築く仕事」とよく言われるけれど、私にとっては、“朝が来るための準備をしている人たち”が働く場所だ。

冬のある朝。目が覚めた瞬間、家の中はしんと静まり返っていた。外は雪。音を吸い込んでしまうような白い世界。カーテンを開けると、「あ、積もっちゃった…」と小さくつぶやいた。でもその日も、いつも通り会社に行くことができた。道路がしっかり除雪されていたからだ。それが当たり前に見えるのは、誰かが前の晩から働いていてくれたから。氷点下の暗闇のなかで除雪車を走らせ、雪をかいて道を作ってくれていた人たちがいた。人がまだ眠っている時間に、誰かの「朝」を支えるために動いている。建設業の底力は、そんな見えない努力にあると思う。

災害対応もまさにそうだ。地震や豪雨で道路が裂け、家々が土砂に埋もれる光景を目の当たりにすると、胸が締めつけられ、言葉を失うほどの無力感におそわれる。自然の力の前では、人間はこんなにも非力なのかと打ちのめされる。けれども、そんな絶望の中で真っ先に現場に駆けつけ、動き出すのが建設業の人たちだ。誰よりも早く重機を搬入し、泥まみれ、汗まみれになりながら、寸断された道をつなぎ、崩れた土地を整え、人々の暮らしを一步一步ずつ取り戻していく。その背中には、黙々とした覚悟と責任がにじんでいる。私が今、携わっている現場も災害復旧のための工事だ。桜並木が美しい地域に流れる穏やかな川だが、災害当時の状況は相当に厳しかったという。ある日、安全パトロールの途中で、ひとりのおばあさんとすれ違った。何気なく「こんにちは」と声をかけた。すると、にっこり穏やかに笑って、「いつもありがとう。大変でしょう。」と言ってくれた。その言葉が胸にすっと染み込んで、自然と顔がほころんだ。建設業の仕事は、表に見えるものだけではない。人の暮らしを、静かに、確かに支えている。そう実感する瞬間が、確かにある。インフラを守る力。地域を立て直す力。それは、図面にも書かれない、けれど確かに存在する「人の手」の力だ。そしてその力が、人と人とのつながりの中で、やさしく育まれていくことを、私はこの現場で改めて感じている。

そして私は今、安全担当として働いている。作業現場の小さな危険を見逃さず、ケガや事故を未然に防ぐこと

が私の役目だ。「また明日も、笑顔で一緒に働けるように」。そんな願いを胸に、仲間たちの命だけでなく、その先にある仲間たちの家族や大切な人たちの笑顔を守りたいと思っている。建設業は、私たちがつくりあげるインフラや施設が、街や地域、ひいては社会全体の支えとなり、みんなの暮らしを守る大きな力になっている。だからこそ、仲間たちの安全を守ることが、社会全体の未来を守ることにつながっている。ときには「うるさいな」と煙たがられることもある。でも、安全は、誰かが声を上げなければ文化として根づいていかない。私は、危険を見つけて、伝えて、それを“みんなで守れる仕組み”に変えていくことで、現場に根づく文化を育てていきたい、これが今の私がこの仕事を通じて目指している“未来を守る力”だ。

建設業は今、大きく変わろうとしている。ドローンを飛ばして上空から現場を確認したり、三次元データを用いた設計を進めたり、ICTの力で安全性や効率が飛躍的に高まっている。体力だけではなく、知識や技術、マネジメント力が求められる現場が増えてきた。いわゆる「男の仕事」というイメージは、もう過去のものになりつつある。また、女性の活躍の場も広がっている。私自身もその一人として、現場で汗をかきながら、図面やデータと向き合い、仲間とコミュニケーションを取りながら、ひとつのプロジェクトを形にしていく。その過程にはたくさんの苦労もあるけれど、それでも「社会を支えている実感」は、日々の誇りとなり、確かなエネルギーを与えてくれる。

建設業は、なくてはならない産業だ。どんなに技術が進んでも、「人の暮らしを支える」という根っこは変わらない。現場で目指しているのは、仲間たちの命とその先にある家族や大切な人たちの笑顔を守ること。そして、建設業を通じて、今も未来も守る力を発揮できることを誇りに思っている。私たちが手掛ける仕事は、目に見える形で社会を支えていくものだ。だからこそ、私自身もその一部であり続けたいと強く思う。これからも安全第一で、誰もが安心して暮らせる未来をつくるために力を尽くしていく。建設業のように、『支える力』を次の世代につなげていくことが、未来を守り、そして未来を形作る力になると信じている。



優秀賞

建設業の現場で学んだこと

よしの ゆか
吉野 結香 [株式会社橋本店 / 宮城県]

私は宮城県で建設業に従事している、24歳の女性現場監督です。これまで、中学校の新築工事と高校の改築工事に携わってきました。どちらの現場も、躯体工事の終盤から内装・外装・防水といった仕上げ工程が主で、私は現場写真の撮影、産業廃棄物の回収手配、日誌の整理など、主に事務的な業務を担当してきました。

建設現場というと、重機を動かすオペレーターや、鉄骨を組み立てる職人のような、力強い作業を想像される方が多いかもしれません。確かにそれらは建設業の象徴的な姿のひとつです。しかし実際に現場で働いてみて感じたのは、そうした作業を支える「裏方」の仕事の重要さでした。

私が日々行っている工事写真の撮影や日誌整理といった作業は、見た目には地味で単調に思えるかもしれませんが、これらは工事の進行状況を正確に記録し、安全性や品質を証明するために欠かせないものです。また、産廃回収のタイミングを誤れば、現場内のスペースが圧迫され、作業全体の進行に影響を及ぼすこともあります。目立たない仕事ではありますが、現場全体の流れを円滑に保つために必要な役割であると実感しています。

建設業の役割は、単に建物をつくるだけでなく、人々の生活や学び、働く環境を支える「基盤」を築くことだと私は考えています。中学校の新築工事では、教室や体育館が完成に近づいていく様子を写真で記録しながら、「ここで子どもたちが何年も学び、過ごしていくのだ」と思い、自然と責任感が芽生えました。

一方で、高校の改築工事では、授業が行われている中での工事だったため、安全面や周囲への配慮がより求められました。廃棄物の搬出時間を調整したり、

掲示物を工夫して注意喚起を行ったりと、細かい気配りの積み重ねが、現場と学校との信頼関係につながるのだと学びました。

現在、建設業界は人手不足や高齢化、気候変動などさまざまな課題に直面しています。その中で、ICTや建設DXといった新しい技術の導入が進み、現場の在り方も少しずつ変わりつつあります。まだアナログな部分が多く残ってはいますが、若い世代の柔軟な発想や新しい視点が活かされていけば、より効率的で働きやすい現場環境を築けると感じています。

また、私は女性として現場に立っていますが、これまで性別を理由に大きな困難を感じたことはありません。むしろ、細やかな気配りや丁寧な対応が、現場の円滑な運営に役立つ場面も多くありました。これからもっと多様な人材が建設業に加わることで、現場の雰囲気や働き方も、より柔軟で多様性のあるものになっていくと期待しています。

私はまだ経験の浅い若手ですが、自分の仕事に誇りを持っています。たとえ表には出にくい業務でも、それが誰かの暮らしを支える建物を完成させる一部になっていると感じられるからです。

これからの建設業は、「モノをつくる」こと以上に、「どんな空間を、誰のために、どのようにつくるのか」という視点がより重要になっていくと思います。私自身も今後さらに経験を重ねながら、次の世代にこの仕事の魅力を伝えていける存在になりたいと考えています。そして、建設業の役割と価値がもっと多くの人に伝わるよう、現場でできることを一つずつ積み重ねていきたいと思っています。



優秀賞

だれかのいのちを守る仕事

ほん ま ま い
本間 麻衣 [株式会社本間組 / 新潟県]

いつも通りの授業中に、突然の大きな揺れ。先生が「頭を守って机の下に隠れて!」と大きな声で言いました。突然のことに驚きながらも、「地震だ」と理解しました。小学5年生、3月11日の出来事でした。

体育館に避難し、集団下校で家に帰ると、毎日楽しみにしていた夕方のドラマの再放送はもちろんありません。東北地方を震源とした大震災が発生し、多くの人が避難していると知りました。震災の1か月後に予定されていた福島県への修学旅行は中止だろうなと思いました。今思えばそれどころではないのに、小学生らしくがっかりしたことを覚えています。大きな揺れの後、一瞬にして崩れてぐちゃぐちゃになった建物がテレビ画面に映し出されていました。目をそらしたくなるような恐怖とショックを受けました。この家の中には誰かがいたのだろうか、これが自分の家や親戚そして友達の家だったら・・・、現実とは思いたくない光景が目の前に広がっていました。

それから数年が経ち高校生となり、進路について考えるようになりました。数学や理科などの得意分野をもっと勉強したい、ものづくりが好き、誰かの役に立つ仕事がしたいと思いを巡らせていました。その時再び地震のニュースを見て、「災害が発生したときに多くの人のいのちを守る建物をつくりたい」という“思い”が蘇りました。そのためには建築をしっかりと学びたいと決断し、大学の建築学科に進みました。

現在は地元新潟の建設会社に入社し、施工管理の仕事をして今年で4年目になります。昨年、法規や構造などの正しい知識を持って施工管理を行うため、一級建築士の資格を取得しました。建築を勉強する前は絶対に壊れない建物が良いと思っていましたが、大地震のときは建物が損傷しても人命被害なく外に避難できる粘り強い破壊になるよう設計することを学びました。また災害復旧も建設業の主な仕事の一つであることも知りました。学ぶほど、建設業の様々な責任を身にしみて感じています。

これまで印象に残っている仕事は、離島の病院の移転新築工事です。設備の老朽化、耐震性の不足、津波浸水の危険に対処するため、新病院の建設が計画されました。初めて経験するRC造の建物で、躯体工事では設計図通りに配筋されているか確認・記録しました。また生コン打設時は、密実なコンクリートになるように、型枠を叩き充填される音を聞き分けながら職人さんたちに声を掛けました。

真夏の躯体工事で汗だくになり、柱や壁の打設時は上か

ら生コンが垂れてきてヘルメットや作業服が汚れることもありました。そんな話を聞くと、大抵の人はエアコンの効いた涼しい室内でおしゃれな服を着て仕事をする方がいいと思うでしょう。しかし、型枠が解体されて綺麗なコンクリートが現れたとき、躯体が上棟したとき、そして外装工事を終えて足場が解体されたときの気持ちは格別です。やはり現場に出ていないと味わえない、何にも代えがたい達成感があります。

施工管理の仕事の魅力は、建物を使う人のことを考え、自分が段取りして職人さんと協力してつくり上げる建物が、毎日変化しながら完成に近づく様子を間近で見られることです。下校中の小学生が現場の前で足を止めて工事の様子を見ている姿や、「あつという間にできてきたねえ」とおばあさんに声をかけられたときには、誇らしい気持ちになります。病院はなるべく行きたくない場所ですが、万が一災害発生したときには、人の支えとなる中核の場所になります。けがをした人や病気の人が安全に、快適とまではいかなくても少しでも不安を減らし過ごせたらと思いながら工事を行いました。

建設業というと、ネガティブな印象を持つ人も多く、実際に自分が建築の道に進みたいと言ったときには「女の子なのに建築なんて」と祖母に反対されました。それでも、あのかとき「多くの人のいのちを守る建物をつくりたい」と決意した“思い”が頭から消えたことはありませんでした。

将来の夢というと、自分の好きなことや両親が関係する仕事の憧れなどからイメージすることも多いと思います。工事中、散歩している幼稚園児たちに手を振ってもらったことがあります。ヘルメットをかぶってカッコいい仕事をしていると思ってもらえたなら嬉しいです。そして大きくなったら厳しい部分も知ったうえで、それでも責任感を持って建設業の仕事をしたと思うこともたちがいてくれたらと思います。

仕事とはいえ、ある程度好きでないと続けていくのは難しいと思います。もちろん建築は好きです。しかし、ただ好きなだけではない、あのかとき感じた“思い”を忘れずに学び続けられる人でありたいです。そして将来の選択肢がたくさんあったこと頃の自分に、「あのかときの決断は間違っていなかったよ」と言いたいです。これからも建築にまっすぐ向き合い、使命感に満ちた自分のチカラで感動的な未来を築いていきたいです。



優秀賞

偏見を超えて ～建設業界が描く明日の社会～

かんばら ゆう や

蒲原 裕也 [株式会社香山組 / 兵庫県]

正直に言うと、私は建設業が嫌いでした。泥にまみれた男社会、古臭く清潔感がない。

そのような先入観が私の心を縛り、この業界を敬遠していたのです。しかしそれは、ただの思い込みに過ぎませんでした。令和6年1月、石川県で起きた能登半島地震。その時メディアでは、連日にわたり救済活動や避難所の様子、政治家の視察などが報道されていました。ただ、これらの報道の陰には、黙々と復旧作業に従事する建設業界の方々がいました。そのような姿を見てみると、本当の意味での社会貢献とは何かを考えるようになり、建設業界に興味を抱き始めたのです。それを機に転職でこの業界に入り1年半。まだ短い経験ですが、私の固定観念は音を立てて崩れ去りました。なぜなら、建設業界は今まさに大変革の真っ只中にあることを知ったからです。

まず第一に、世間が持っている建設業へのイメージと、実際に現場で起こっている変化のギャップは本当に大きいのです。かつては「泥臭い職人技の世界」と揶揄されていた現場が、今では最先端テクノロジーが息づく未来の舞台に生まれ変わっているのです。

例えば、私が日々行っている書類業務の一つをとっても、ここ数年でガラッと変化しました。数年前までは紙での申請や提出、契約書の作成が当たり前だったそうです。しかし今は電子化がどんどん進み、クラウド上での情報共有や電子印鑑、オンライン申請が当たり前ようになってきています。また、作業の効率化に加え、ミスの削減や働き方の柔軟性向上など、様々なメリットが生まれています。

さらに、こうした変化は、ただのデジタル化で終わりません。私はこのことは、建設業の概念そのものを変える出来事だと思うのです。昔の「現場中心で職人さんの経験頼み」から、「データに基づき、皆で協力して社会のインフラを作る」世界へ。つまり、勘と経験の業界から、知識と技術の業界に変わっているのです。

この変化を象徴するのが、BIM/CIMの導入です。現場から提出される図面や報告書を見ていると、これは単なる設計ソフトではないのだと分かります。建物やインフラのライフサイクル全体を通じて情報をまとめる仕組みで、まるで未来の街を手の平で操っているような感覚になります。このような技術があることで、工事の精度が上がって効率も良くなり、持続可能な社会作りにも役立っています。

しかし、この大きな変化は技術だけの話ではありません

ん。業界の人材構造に対しても大きな変化が訪れており、この変革の本当の主役は「若い人たち」だということです。高齢化が進む建設業界において、若手の積極的な登用、そしてITスキルを持つ世代が活躍することで、建設業界に新しい活力が生まれているのです。

実際に若手技術者とのやり取りを通じて感じることは、彼らの新鮮な発想力が、従来からの技術と組み合わせ、建設業界の未来を明るく描いているということです。彼らはVRを活用した施工シミュレーションや、AIを用いた品質管理の自動化、さらにはIoTを駆使したリアルタイムでの現場管理など、従来では考えられなかった革新的な取り組みを次々と実現しています。彼らにとって建設現場は、今では「古い業界」ではなく、最先端技術を駆使できる「創造の場」なのでしょう。

このような変化を目の当たりにすると、建設業界は「過去の遺産」ではなく、社会の未来を支える「未来創造の場」であることがよく分かります。この変化は単なる効率化だけの話ではありません。それは、建設業界が「社会システム・デザイン業」として、再定義されることを意味しているのです。私たちは単に「モノ」を作るのではなく、「社会の未来」を設計しているのだと感じます。

事務職として実感することは、若い世代の柔軟な思考と最新技術への適応力が、建設業界を社会課題解決のプラットフォームに変えているということです。当然、この業界にはまだまだ解決すべき課題も多くあります。長時間労働や複雑な下請け構造といった昔からの課題は確に残っており、日々の仕事でもその現実を目にすることがあります。変化は一日二日では実現しません。ただ、現実と向き合い一歩ずつ前進することが、私たちの使命だと思うのです。

未来の若者たちに伝えたいです。私が見る限りでは、建設業は決して古い産業ではありません。災害から人々を守り、豊かな社会を築く。この責任を果たす建設業界は、人類の未来を創造する知的産業なのです。この大変革の時代に、建設業界は新しい仲間を求めています。今までの枠を超えた発想で、社会の課題に立ち向かう。そのような挑戦の場がここにあります。

かつて私が抱いていた偏見は、この業界の本当の姿を知る中で払拭されつつあります。建設業の本当の魅力は、単に「モノ」を作るのではなく、「未来」を作ることにあるのだと感じています。この業界に身を置く者は皆、明日の社会を築く設計者なのです。



優秀賞

懸け橋になるということ ー過去と未来をつなぐ建設という生き方ー

なかがわ れん

中川 蓮 [株式会社中川建材 / 兵庫県]

「お前、明日から現場に来い」

高校を中退し、人生の行き場がわからず毎日をただ過ごしていた頃、そんな自分に父親が放ったこの一言が建設業との出会いでした。

父は地域に根ざした建設会社を営んでおり、私はその息子という立場でした。しかし、社長の息子であることが当時の私には恥ずかしく、重たく、怖かったのです。期待される分だけ失敗すれば「どうせ甘やかされて育っただけ」と陰口を言われる。そんな周囲の視線に逃げ出したくなるほどのプレッシャーを感じていました。正直はじめは気が重く、負担に感じていました。好きだった重機やダンプの世界に少し期待を抱いていたものの、現場で任されたのは雑用や手元作業。ただ身体を酷使する日々。汗まみれ、泥だらけ、気づけば不満ばかりが口をついて出ていました。「きつい、汚い、危険」いわゆる旧3Kと言われるこの業界の現実を最初の数ヶ月でまざまざと感じました。でも、本当に心に引っかかったのは「この仕事に楽しさがない」と感じたことでした。自分には何もできない。そう感じる悔しさや情けなさ。ただどこかで「こんなはずじゃない」と思う自分もいたのです。

そして私は、心が折れて都会へと逃げ出しました。外の世界を見て、色んな人に揉まれ、たくさん失敗も経験しました。でも、その環境のおかげで気づかされた事があります。

自分は「父の息子である前に一人の人間として、地元根付いて生きていきたい」と。それは家族や仲間、育った環境に感謝できたからです。それが恩返しであり、私自身が納得できる生き方だと思い、地元へ帰る決意をしました。そして父が営む建設会社に戻り、仕事に没頭していきなかつた、現場にはかつての自分と同じように、自分の価値を見つけたくてもがく若者たちがたくさんいる事に気づきます。自分を変えたい、自分を認めてほしい。そんな強い思いを持った仲間が泥まみれになりながらも現場で真剣に働いている。ぶつかり合いながらも支え合い、笑い合い、失敗しても前を向いて進む。そんな彼らの姿に自分も励まされ、彼らの強さを教えてくれた建設業の魅力を伝えていきたいと思うようになりました。

この業界には、居場所があります。失敗してもやり直せる。仲間がいる。誰かの役に立てる。そしてその実感を心から感じられる。私たちのような「ちょっと不器用な若者」にとって、建設業は人生を立て直すチャンスのある場であり、自分の力を試せるフィールドであり、何よりこの仕事を

「心から楽しい」と感じられる。今では新3Kとなり「給料が良い」「休暇が取れる」「希望が持てる」今の時代に合わせて、業界全体が変わり始めています。ICTやドローンなどの新技術も積極的に導入され、働き方改革も進んでいます。若い人達が「入りたい」と思える業界へ変わろうとしているのです。

建設業の役割は、モノをつくることだけではありません。災害時の復旧、日々のインフラの維持管理、防災・減災のための整備、地域住民との連携、すべてが私たちの仕事です。完成した後は見えなくなる努力ですが、そこには地域を守る「覚悟」があります。完成したものが人々に使われ、「ありがとう」の声をいただいたとき、自分の仕事に社会に役立っていると実感します。舗装し直した通学路を、子どもたちが元気に駆け抜ける姿。長年使われた橋が新しくなり、「もう安心だな」と微笑む地域の人たちの言葉。目に見えない苦勞が「形」になり、「記憶」になり、「誇り」になる瞬間です。

建設業の魅力は、ただ仕事をこなすだけでは味わえません。達成感と誇れるスケール感。この仕事には人の人生と社会を支える責任があり、その分だけ強いやりがいがあります。

今の私にとって建設業は使命です。地域と共に、覚悟を持って建設の世界に立って、これからを担う若者たちへ私は声を大にして伝えたいです。「建設は、カッコいい」と。「建設は、人の命と暮らしを守る最高の仕事だ」と。そして「人生を変えられる場所が、ここにある」と。建設業の未来のために、これからも挑戦を続けます。

過去と未来をつなぎ、誰かの未来のために汗を流す。その姿が誰かの希望になると信じて。そして、我が子を含め、今つまずいている若者たちが、どんな産業でも明日を担う存在として前を向いてほしい。そのために私は、今こうして自分の足で立ち、声を上げています。建設の未来のために。若者たちの可能性のために。そして、自分の人生に胸を張って生きるために。

私は、これからの未来に心から期待しています。時代が変わっても、人の思いがある限り、建設業は必ず必要とされる。だから私は、若者たちと一緒に建設の世界で力を合わせていきたい。

そして、建設産業の役割と未来を守っていくために、過去と未来をつなぐ懸け橋のような存在であり続けたい。

それが私の選んだ「過去と未来をつなぐ建設という生き方」です。



優秀賞

建設ディレクターを憧れに

きしもと さや か
岸本 紗也加 [唐津土建工業株式会社 / 佐賀県]

「建設ディレクター」。私が建設会社に入社して初めて与えられた役職です。建設ディレクターとして働くことになった時、正直に言えば「建設ディレクターって何?」と感じていました。

そもそも、文系学科専攻で建設業界とは何の縁もなかった私が建設会社で働くことになったきっかけは、「現場で働く人の力になりたい」という理由でした。小学校から大学まで実家から通学した私は、卒業後も地元に残って育ててくれた地元で貢献できるような仕事がしたいと思っていました。そんな中、大学での就職活動に伴う業界研究を通して、建設業がいかに地域へ貢献しているかということを知りました。当たり前のことですが、自分たちがこれまで過ごしてきた家や学校、普段通る道も全て建設業があってこそのもので、建設会社で働く人がいなければ安全な暮らしさえないのだと実感したことを今でも覚えています。企業説明会の際に、採用担当の方から「災害時のレスキュー隊も、建設業が道路を整備しないと安全な救助活動はできないのですよ」という話を聞いて、日々の安全な暮らしが当たり前ではないことを痛感しました。これまでの生活で幾度となく目にしてきたはずの工事現場も、意識するまではただの景色に過ぎませんでした。一度建設業を意識してからというもの、通りかかるとびに工事現場が目につくようになっていきました。それから現場で働く人の力になりたいと思い、建設会社を探すまでに時間はかかりませんでした。地元の建設会社へ入社し、工務課へ配属されました。就職活動時にイメージしていた、事務職として現場のサポートをしながら働くことにやりがいを感じていた三年目のある日、上司から、「建設ディレクター講座を受けてみないか」と声を掛けられました。今から六年前の当時、聞いたこともなかった「建設ディレクター」という言葉に戸惑いはあったものの、「自分にできることがあるなら」と思い、建設ディレクター育成講座を受講しました。

講座を受講し晴れて「建設ディレクター」を名乗れるようになったものの、事はそう単純にはいきませんでした。

まず取り組んだことが、工事写真の整理でした。後から考えると、このスタートが良くなかったように思います。現場を見ていない私が、現場事務所でもない本社で、どこかも分からない場所の工事写真を整理するのは少々ハードルが高く、思うように業務が進みませんでした。そ

こで、一度立ち止まり、現場が求めることと自分ができることを照らし合わせることから始めました。その間、手持ち業務の配置転換があり工務課から経理課へと異動していましたが、異動先でも建設ディレクターとしての役割を模索し、施工体制台帳の整備へと舵を切りました。普段は本社で経理業務を中心に広報や採用活動にも取り組む傍ら、現場に多く入場される下請け業者さんの情報を現場の技術者とやり取りを重ね、施工体制台帳へとまとめていきました。マニュアルを整備することで自社の建設ディレクター業務に見える化し、適宜現場を行き来して書類検査に立ち会うなど、現在も建設ディレクターとしての業務を遂行しています。

「建設ディレクター」である自分は、まさに学生の頃に思い描いていた、現場で働く人を支える仕事をしていきます。もちろんまだ改善することや展開していくことは多くありますが、少なくとも「現場のお手伝いさん」ではなく「建設ディレクター」として働く姿は、自分自身が誇りを持てる姿に近づいています。何者でもなかった私が建設ディレクターとして働くことで、専門の技術者だけでなく、幅広い人が建設業で活躍できることを体現しているように思えて嬉しく感じる日々です。

インフルエンサーや動画クリエイターなど、一昔前は聞いたこともなかったような職業がこどもたちの憧れとなった令和のこの時代、建設業界でも新しい職域が活躍しはじめています。採用活動においても、「技術者としてはもちろんですが、建設ディレクターとしての働き方もありますよ」と言うと、興味深く質問してくれる学生も多くいます。業界内でも推進中の建設ディレクターは、まだまだ学生たちに馴染みのある言葉ではありませんが、だからこそ、建設ディレクターが建設業への門扉を広げる一翼を担えるのではないかと考えています。キラキラと輝ける、出来立てほやほやの「建設ディレクター」。それは建設業界だけでなく、将来への希望にあふれるこどもたちが輝ける場所を増やすことにも繋がっていくはずで。まずは多くの人に建設ディレクターの存在を知ってもらい、憧れられる存在になれるよう、これからも自分自身の理想の「建設ディレクター」像を追い求めていきたいです。そして、いつの日かこどもたちが「建設ディレクターになりたい」と言ってくれるようになる日を楽しみにしています。

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和7年度 高校生の作文コンクール

■ 趣 旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、将来の進路として建設産業を考えている高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒を対象に、建設業への思いや建設業を進路に考えるようになったきっかけなどを広く伝えていただく場として、作文コンクールを実施し入選作品による作品集を多くの方々に届けています。

「高校生の作文コンクール」は平成25年度から実施し、今回で13回目となりました。

■ 募集概要

- 応募資格 高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒
応募期間 令和7年5月8日(木)～6月30日(月)
応募テーマ 建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。
私が思う建設産業の魅力 又は 建設産業の未来と私の将来
応募総数 1040作品

■ 作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]

<https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/result.html>

■ 選考委員

- 古 阪 秀 三 立命館大学 客員教授
建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
浦 江 真 人 東洋大学 教授
建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会副委員長
城 麻 実 国土交通省 不動産・建設経済局 建設振興課長
岩 野 剛 (一社)全国建設業協会 常任参与
樋 脇 毅 (公社)全国鉄筋工事業協会 常任理事
奥 地 正 敏 (一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事



国土交通大臣賞

人を笑顔にする職業

あら き ゆうじん
荒木 悠迅 [金沢市立工業高等学校 土木科 2年]



自分たちが毎日使う、よく通るその道路はどのようにしてできているか知っていますか。私は毎日使う、また毎日通るこの道路について深く考えたことなんてありませんでした。しかし、2024年1月1日に起こった能登半島地震により、今までは普通に使っていた道路が寸断や崩落で使えなくなりました。そして移動するのも今まではすぐに到着する場所でも倍以上の時間がかかり、道路が使えなくなることがどれだけ大変なことか気づかされました。そこから普段当たり前だった道路に興味を持ち、自分は工業高校に入学しました。私は工業高校に入学する前までは道路工事作業員が街で道路を直しているのを見かけるため、この方たちが道路を作っていると思っていました。ですが、この方たちだけでできているのではなく測量士の方などたくさんの人が関わっていることを知りました。また、このことにより建設産業について興味を持ちました。私の最初の建設産業の印象は「力仕事できつそう」、「自分にはできなさそう」、などといったあまり良い印象ではありませんでした。ですが工業高校に進学し、工業や建設産業について学ぶにつれてとてもやりがいのある職業だと印象が180度変わりました。

建設業は、建物を建てるのにも、道路を作るのにも欠かせない職業です。またすべての人が使い生活に欠かせないものを作る仕事です。そしてその作ったものを地図に残すことができる職業であり、今後もなくならない必要不可欠な職業だと私は考えています。また、人を笑顔にできる職業だと私は考えています。このように考える理由は、能登半島地震により私の祖母の家が傾き赤色の札が張られ、その家には住むのが危険と判断されたときのことでした。その札を見た祖母はとても悲しんでいました。そこで、「もうこの家には住めないのか」と泣き崩れる祖母を見ました。私は初めて祖母のこんな姿を見ました。そして月日がたち建設産業の技術により、家を直せると祖母が聞いたときとても笑顔になっているのを見ました。建設産業はあれだけ泣き崩れていた人をこんなにも笑顔にすることのできるととても素敵でカッコいい職業だなとそのとき思いました。そして私はこんな建設産業にあこがれを抱きました。私は今後建設産業界の一員となり、これからの社会を築ける立派な人になり、人を笑顔にしたいと考えています。また私の故郷である石川県を素敵な町や社会にし、震災のあった能登を建設産業の力や魅力で地震の起こる前のような活気のある素敵な街にできるように頑張りたいです。またこれからの建設産業の発展のためにいろいろな人に建設産業の魅力を伝えていきたいと思っています。





国土交通大臣賞

あの神社からはじまったこと

しのみや なぎさ
四宮 渚咲 [徳島県立阿南光高等学校 都市環境システム科 2年]



幼い頃、母の手に引かれて、山あいの神社を訪れた記憶がある。苔むした石畳に二つの足音を落とすたび、風の音、木々のさざめき、遙か遠くからは、ウグイスの声も聞こえてくる。かえって際立つ静けさは、まるで時さえも歩みを緩めたようで、私はただ、その空間に母の体温と春の訪れだけを感じていた。

境内の奥深くには、社が静かにたたずんでいる。風雨に洗われた細かなひびも、穏やかな色合いに変化した木の表面も、人々が長い間、大切に見守ってきたという証のように感じられ、私の幼い目に強く焼き付けられた。同時にその光景は、「どうして、あの社は長い年月を経てもなお、美しくそこにあり続けられるのだろう」という小さな問いを、心に灯した。

高校生となった私は、徳島県西部に残る「うだつの町並み」を訪れた。連なる瓦屋根や木造の格子戸、隣屋の間の「うだつ」細い路地。一本の道に映るのは、歴史の重みだけではなく、当時の人々の暮らしをうかがうことのできる、穏やかな日常の風景だった。さらに、戸ごとの家屋には、陽の入り方や風の通り道、災害から人々を守る工夫が施されていることに気づいたとき、幼い日に感じたあの問いの答えに少し触れられたような気がした。「建てる」ということは、単に形を作ることだけではない。暮らしを支え、命を守り、未来と地続きである「今」を築く行いである。そしてその本質は、昔も今も、何一つ変わっていないのだと。

今、私は高校の授業で、建設の現場を支えるさまざまな知識や技術について学んでいる。

衛星やドローンを用いた測量、施工の手順や安全管理、現場見学ではARを用いた空間の可視化や、IoTによってその全体がリアルタイムでつながる施工の様子など、日々目の当たりにしている。それは、幼い私が考えもしなかった未来の建設業の姿である。

現代の構造物は、最新のデジタル技術によって効率的に創られるため、無機質で冷たく感じられることもあるかもしれない。しかし、その背景には、長年の経験を積み重ねてきた職人たちの技術や知識がしっかりと根づいている。建築に携わってきた人々の数だけ、載せた想いが、目には見えないけれど確かに構造物に宿っているのだと確信する。建設するとは、目に見える構造物を、創ることに加え、人々の暮らしや想いが交差する場を作り上げていくことであり、誰かの今日を守り、その先も寄り添っていくことだと考える。

私は建設産業に、心から敬意を抱いている。それは古き社を守り、町並みを今につないできた職人たちすべてを支える、「誰かのために」というまっすぐな想いに触れているからに違いない。

いつか私も、建設業を通して、その想いをしっかり受け取り、次の世代へと手渡していける人間になりたい。汗にまみれた努力も、積み重ねた時間も、誰かの暮らしや心の拠りどころとして、静かに息づき続ける。そのように、未来へと続く一歩に、自らも関わっていきたい。その実現のためにも、私は心惹かれた構造物に自ら足を運び、その技術をこの目で直に感じ、さらに、新たな視点からも構造物をとらえ、誰かを支えられる技術者になりたい。その夢が実現するとき、あの日、神社の静けさに心惹かれていた、幼い日の私がきっと一番喜んでくれると思う。





不動産・建設経済局長賞

目の当たりにした 土砂災害が教えたもの

いとう そう た
伊藤 颯太 [千葉県立京葉工業高等学校 建設科 3年]



僕は小学生の頃から、土木系の会社を営んでいる父親の手伝いで、常に山や植物、重機について触れてきました。

父の会社では建設残土の処分、ヤシの木の栽培、放置森林の開拓など、その為、土木という分野は常に自然の状況に左右され、予定通り、計画通りに工事が進むことは、まずありえないということも自分の体で直接知ることができました。

例えば、2019年に関東地方に上陸した令和元年東日本台風(台風19号)による我が家の被害では、父の残土処分場で土砂崩れが起こり、事務所の母屋が傾き、窓ガラスが割れ、歪んでしまったのでドアの開閉も容易にできなくなってしまいました。

さらに、倉庫と置いてあった20tクラスの重機も崩れた土砂と一緒に谷底へと流れてしまい、原形を留めていなかったことを今でも鮮明に覚えています。

その後の復旧作業でも、台風で降り注いだ大量の雨で、地盤が軟弱化し土砂が水のようになっていたので、まともに重機も動けず、人間ですら腰下のあたりまで埋まってしまうなど作業は難航し、今まで自分で盛土をしたり整地した土砂と全く同じ土砂なのに、自然災害によって起きてしまった被害を目の当たりにすると、土砂は自分で思っている以上に恐ろしいものなのだと恐怖を覚えました。

実際に2023年の建設業全体の死者数は223人であり、そのうち土木作業中の死亡者数は87人、その中にはトンネル工事など崩落事故で亡くなられた方も含まれているということでした。そういった意味でも近年爆発的な進化をみせている建設業界の科学的技術やインターネットを活用した技術の発展の理由も見えてくると思います。

例えばICTを活用した場合では、現場にいなくても事務所から重機を操縦したり、施工状況などを詳しく確認できるので、トンネル工事やダム工事など、常に危険と隣り合わせの作業では作業者の安全を確保できるだけでなく、近年別の問題となっている建設業界の人手不足、高齢化などにもとても効果的であると考えられます。

そのため、接続可能距離を更に長くしたり、現場と施工を行う人とのデータ送信の遅延を更に小さくしていくこと、操作の単純化や、作業の分散化などを行うことで工期の短縮や、人員が減ることにより人件費の削減も見込めると思います。

なのでこれからの土木は、昔ながらの技術やノウハウを後世に引き継ぐことはもちろん、ICTの活用や最新土木技術の採用、発展などにも重きを置くことにより、土木業界や建設業界で言われてきた3K、「きつい」、「汚い」、「危険」のイメージを180°変えることもできると思うので、若手の人材が土木業界に興味をもったり、負のイメージを減らしていければ、人材不足の問題も少しずつ打開していけると考えました。

僕が高校を卒業したら、実際に働いてみて今の土木業界に不足していることや課題点を考え、積極的に最新技術の採用や新しい人材教育を行い、新しい土木業界をつくって、牽引していきたいと思っています。





不動産・建設経済局長賞 ダムに魅せられて -土木の道へ進む決意-

おおた けいどう
大田 恵瞳 [金沢市立工業高等学校 土木科 3年]



私の趣味は「ダム巡り」をすることだ。このことを人に話すとよく笑われたり、驚かれたりする。

「なぜそんな地味なものが好きなのか?」と聞かれることもある。だが私にとってダムはただの構造物ではなく、人生の目標を与えてくれたかけがえのない存在だ。

私がダムの魅力に気づいたのは小学5年生の夏休みの自由研究で手取川ダムを訪れ、実際に見て圧倒的な存在感、恵まれた自然にそびえ立つ美しい堤体に一瞬で目を奪われた。そこからダムについて詳しく調べ、石川県内の色々なダムを巡るようになり、ダムの構造や働きについて詳しく調べるようになった。

日本国内にはおよそ2700基存在するといわれており、一つとして同じ形のダムは存在しない。型式で分ければ、重力式コンクリートダム、アーチダム、ロックフィルダム、アースダム、バットレスダム、コンパインダムと分類できるが、それぞれに個性がある。これはまるで、人間に個性があるのと同じように感じられ、私がダムに惹かれた理由の一つだ。

ダムは、ただ水を溜めているだけに見えるかもしれない。しかし、実際には私たちの暮らしに欠かせない「利水」や「治水」という重要な役割を担っている。水が不足しているときには放流して生活用水や農業用水として利用され、逆に大雨や台風ときには川の氾濫を防ぐために水を溜めてくれる。私たちが当たり前のように安全に暮らせるのは、こうしたダムの働きがあるからだ。

日本で1番堤高が高い黒部ダム、1番堤頂長が大きい大谷内ダム、1番総貯水容量が多い徳山ダム。それぞれが異なる特徴を持ち、どれもが日本のインフラを支える重要な存在だ。私はこれらすべての特徴を兼ね備えた「理想のダム」をつくるのが夢だった。しかし現実にはダム建設には多くの課題がある。強固な岩盤を持つ場所が必要で、多くの資材と人手も必要で、場所の選定も難しい。さらに、ダム建設のために村や集落の人たちに立ち退きをお願いしなければならないケースもあり、簡単には進められない。それでも私はダムが果たしている役割を考えると、その価値はとて大きいと信じている。

そんなダムをつくる土木作業員の方々をとてとても尊敬している。危険を伴いながらも、生活を支えるために汗を流し、完成すれば地図にも残る誇り高い仕事だ。私がダムに惹かれるのは、巨大な構造物としての美しさだけでなく、その裏にある技術と努力の積み重ねが感じられるからだ。

私は工業高校で「土木」の道を選んだ。将来は、日本や世界のインフラを支える土木作業員として活躍したいと強く思っている。災害復興や日々の生活を支えるために、建設業はこれからの社会にとってなくてはならない仕事の一つだ。その一員となれるよう、これからも勉強に励み、技術をもっと磨いていく。

笑われるかもしれない。でも、私の夢は本気だ。そしていつか誰かの暮らしを守るダムを、自分の手でつくってみせる。





不動産・建設経済局長賞

祖父から受け継ぐ 「丁寧」が支える暮らし

みずの るんな

水野 月 [静岡県立天竜高等学校 総合学科 建築系列 2年]



私が大工に憧れを抱き始めたのは、中学2年生の頃のこと。その大きなきっかけは、祖父の存在だ。小さい頃からものづくりが好きだった私は、祖父が実際に家を建てている最中の現場を見に行くのが何よりの楽しみだった。そこで見たのは、普段の優しい祖父とは違う、真剣な眼差しで黙々と作業に打ち込む祖父の背中だ。木材の清々しい香りが漂う中で、工具の小気味よい音が響く。祖父はの一つ一つを寸分の狂いなく、そして驚くほど「丁寧」にこなしていくその姿は、私にとって単に技術が優れているというだけでなく、「仕事とは、これほどまでに心を込めて行うものなのだ」という、深い感動とカッコよさを与えてくれた。そして、その「丁寧」な仕事ぶりによって、みるみるうちに美しい家が形になっていく光景に、私は感動した。

高校で建築の授業が始まり、初めて木材にノコギリを入れた時、予想以上にきれいに切り進めることができ、その手応えに感動した。当初は、上手に木を切れるか不安でいっぱいだった。しかし、先生に何度も質問したり、作業説明書を細部まで確認したりしながら、一つ一つの工程を「丁寧」に取り組み、納得いくまで手を動かした。そうして切り出した木材が、思い描いた通りの形になったとき、ただの板が人を支える一部に生まれ変わった気がした。この時の達成感は、ものづくりの面白さを超えて、「誰かの暮らしを守る一歩」だと感じた。

学びが進むにつれ、私は「丁寧さ」が持つ本当の重み、つまり「正確さ」の重要性を痛感した。特に製図の授業では、線の太さや角度、寸法の正確性など厳格な決まりが多く、苦戦の連続だった。わずかな数ミリのズレが製図全体のバランスを大きく崩し、何度もやり直した。何度もやり直ししながら、私は、祖父が教えてくれた「丁寧さ」は、同時に「正確さ」でなくてはならないと気付いた。数ミリの誤差が人の命を脅かすことさえある。それほど建設産業の責任は重い。

私は今、「人々の命と暮らしを守る家を、自分の手で建てたい」と強く思っている。そのために、高校で学べることを一つ残らず吸収し、技能検定などの資格取得にも積極的に挑むつもりだ。祖父から受け継いだ丁寧さと正確さを磨き続けることで、安心して暮らせる空間を形にする大工になることが、私の夢だ。

家は人の命を守り、心を支え、未来を築く場所だ。その土台を支えるのが建設産業の仕事であり、その支えの根本にあるのが「丁寧さ」と「正確さ」だと、私は信じている。だから私は、祖父の背中から学んだ丁寧さと、学びの中で得た正確さを胸に、人々の命と暮らしを守る建設産業の魅力を自分の手で体現していく。これが、私の進む道であり、私が思う建設産業の最大の魅力だ。





不動産・建設経済局長賞 コミュニケーションが 架ける橋

くめ かずは
桑 万葉 [愛知県立愛知総合工科高等学校 建設科 3年]



私が考える建設産業の魅力は、「コミュニケーション」です。

なぜなら、様々な方とコミュニケーションをとることで、個々の思いや技術が形となって現れる、一人では成し得ないことを人との繋がりによって完成する。そこに建設産業の魅力があると思うからです。

このように考えるようになったのは、二つの理由があります。

一つ目の理由は、私自身が「コミュニケーション」を通して建設を知り、建設学科のある学校に進学したことです。

まず中学時代の私は、高校受験に対し消極的でした。自分が何をしたいのか、まったくわかっていなかったのです。ただ人と話すのは得意で好きでした。

そんなときある高校の見学会で私は、大きく変化を迎えました。

文化祭と同時に行われた学校見学で、私は建設という分野に出会いました。先生や先輩方の語る魅力の詰まった言葉の数々にとても感動し、「私にもこんな選択肢が手の届く距離にあったのだ」と驚き、同時に建設という分野が人と話す、コミュニケーションが必要なのだと気付き強く惹かれました。

二つ目の理由は、私が建設の魅力を「伝える立場」になったと実感した瞬間です。

高校1年の年、文化祭の出し物で「橋を造る」という話が持ち上がりました。

最初は本当にできるのかなと不安に思っ様子をみているばかりでした。実際に造り始めると人を乗せるための安全管理や費用などの問題が出てきました。しかし、「せっかくならやろう」と先輩や先生方が尽力してくださり、制作していく中の課題は話し合って決め、先生や先輩方が一丸となり、コミュニケーションを欠かさずに橋を造りました。完成した橋は、先輩二人を軽々と乗せる、総重量110kgを支えられる立派なものでした。私は協力することのすばらしさと同時に先陣を切っ、私たちに「魅力」というバトンを繋ぐ先生方と先輩方の背中を見て、心を動かされると同時に多くを学びました。先輩方と協力して完成させたこの橋造りは私にとって、協力してものをつくり上げるという達成感とやりがいをもたらしました。

この橋を展示し、実際に乗ってもらったのは文化祭であり、中学生に向けた学校説明会の日です。私が体感してきた魅力を伝え、橋に乗ってもらう。そして少しでも「すごい」「楽しい」と言ってもらえた時の感動は言葉にならず、体がむず痒いように震えました。

私はコミュニケーションを通して建設産業の魅力を知り、伝わるモノに心を動かされてきました。

この二つの経験から私は、「コミュニケーションを通して伝えること」こそが建設産業においてずっと変わらない不変の魅力だと考えました。

たくさんの人とのコミュニケーションを重ねて繋がり、魅力を最大限引き出す。そうすることで人に「素晴らしい」と思わせ、感動させることができるものづくりができるのだと思うのです。





不動産・建設経済局長賞 強い大人

い い なお た ろ う
伊井 直太郎 [鹿児島県立鹿児島工業高等学校 建設技術系 2 年]



私は、いつもの生活の中で、建設関係者の人たちをたくさん見かけます。特に印象的なのは、自転車通学中に見るトンネル付近での工事現場で働いている人たちです。私は毎日の通学路で必ずトンネルを通ります。そのトンネルには、入り口の近くに仮設階段があり、まずそこで自転車を押しながら登っていったトンネルの入り口にたどりつきます。この一連の動作には、もう慣れたのですが、近いうちに、この動作をせずに、直接トンネルの入り口に自転車でたどり着ける小さな坂ができるらしいです。もしもできたら、とても便利だなと思います。

毎日仮設トンネルを登っていると、現場の方々が作業しているのが見えます。たまにとっても偉い感じの人が測量を始めたりします。そこには見たことのある道具がちらほらあり、横目で見ていると、面白そうだなと思っていつも階段を登っています。不便な現状を改善し、より良い状態にする建設の仕事は、存在し続ける限り、ずっと社会をいい方向にもっていかけてくれるなど建設現場を見る度に思います。しかし、トンネル付近の工事を毎日見る度に、こんなに時間をかけてやる作業なのかなという思いも出てきました。その時の私の感覚では、ただコンクリートで斜めの板をつくるだけだろうという感じで非常に建設計画に対する理解がありませんでした。

ある日、建設計画に関するビデオを見ました。その内容は、瀬戸大橋を海に建てた関係者たちのプロフェッショナル動画でした。橋の支柱を置く重たいケーソンを荒い海の中に誤差を生じさせずに設置する作業のところでは、自然の波に苦しめられつつ、海にケーソンを設置できたところで感動しました。そこにたどりつくまで、とても長い期間がかかっていたことも動画内で説明されて、想像よりとても厳しい現場であることがわかりました。あと何といても動画内に出てくる技術者たちの男気がかっこよかったです。全ての責任を自分で負い、これまでの経験を活かして逆転の策を叩き出していき、こんなカッコいい人たちに、私は残りの学校生活2年間でどこまで追いつけるのだろうか、そのビデオを見て考えていました。

私には、夢ができました。それは、測量系の資格をたくさん取って、自分で測量の会社を立ち上げることです。不便な状態を改善し、より良い状態にする建設の仕事の一環を担い、すべての責任を自分で負える強い大人になろうと思ったからです。まだ私は責任を背負い、けじめをつけるという経験をしたことがなく、それがいかに大変で、辛いことなのかも分かりません。ですが、私は挑戦してみたいです。

建設業は、存在するだけで、未来をよくしてくれる産業だと確信しています。その存在をもっともっと濃くするために、私は一人前の技術者を目指して勉強したいと思います。

トンネルの建設現場を見る目が変わりました。難題をかかえても前に進む建設業の人々をこれからもずっと尊敬し続けます。





優秀賞

自分らしい道へ

きたじま こうせい

北嶋 航成 [北海道函館工業高等学校 環境土木科 3年]

道路と人生は密接に繋がっている。私は、昔から道路やトンネル、道路地図を見るのが好きだ。特に北海道の国道や道道の路線番号、市町村の名前を覚えるのが得意で、人に驚かれることもある。幼い頃から道路を眺める時間が、私にとって特別な時間だった。今は函館工業高校の環境土木科に通っており、将来は北海道開発局の道路部門の仕事に就きたいと考えている。道路は人々の暮らしや経済活動を支える大切なインフラだ。毎日使われている道路の一つひとつには、多くの人の努力と技術が込められており、その一部を担う仕事に就きたいと思っている。

今、「高校生ものづくりコンテスト」の測量部門に出場するため、三人で一致団結して練習に励んでいる。昨年は全国大会まで進み、表彰台には届かなかったが四位という結果を残した。測量は土木工事の基礎となる大切な作業で、少しの誤差が大きな影響を与えるため、正確さと集中力が求められる。何度もやり直しながらも声をかけ合い、役割を分担して取り組むことで、成果が出るうえにやりがいがある。この経験を通して、建設の仕事は一人では決して成り立たず、仲間と協力することの大切さを改めて実感した。

建設産業は今、大きな課題に直面していると感じている。少子高齢化による労働力不足、地球温暖化による自然災害の増加、資材の高騰化など様々な問題がある。しかし、同時にドローンやICT、AIなどの先進技術を導入することで、現場の安全性や作業効率の向上が期待できる。建設現場は「きつい、汚い、危険」というイメージだが、魅力のある仕事として変わり始めれば良いと思う。

私が目指しているのは、環境に優しい道路や、自然災害にも強いインフラを作る技術者だ。地球温暖化の影響が年々深刻化する中で、土木の役割はますます重要になると思う。私たちが快適に、そして安全に暮らせる社会を守るために、道路や橋といった公共インフラは必要不可欠だ。私は将来、そうした社会基盤を支える側に立ちたいと思う。そして、建設産業の魅力を次の世代の子どもたちにも伝えていきたい。「みんなで力を合わせて大きなものをつくる」ことの楽しさや、「社会に直接貢献できる」といったやりがいをもっと多くの人に知ってもらいたい。私自身、仲間と協力してものづくりに挑戦する中で、その面白さを肌で感じている。こうした体験を通して、建設産業に憧れを持つ人が増えてくれたら嬉しい。

建設産業はこれからも人々の暮らしを支え、地球環境とともに向き合っていく重要な仕事である。一人ひとりの力は小さくても、仲間と力を合わせれば大きな成果を生み出せる。私も将来、そんなチームの一員として、自分の技術と情熱を持って社会のために活かしていきたい。道路は、どこかへ向かうための道でありながら、人生にも似ていると思う。まっすぐ進む道もあれば、曲がりくねった道やトンネルのように先が見えない道もある。それでも一歩ずつ進めば、やがて光が見えてくる。そんな道路の姿に、人生の在り方を重ねてしまう。建設産業の未来がこれからもっと明るく、より魅力のあるものとなるように、私も前に進んで頑張りたい。道路から学んできたことを大切にしながら、自分らしい道を切り開いていきたい。





優秀賞

安らぎを紡ぐ建築の力

あつみ こころ
熱海 心琉 [宮城県古川工業高等学校 建築科 2年]

「文学は人を語り、建築は人間を表す。」近代建築の三大巨匠と呼ばれた建築家の一人、フランク・ロイド・ライトの言葉である。建築物は建築主の考えや想い、趣味などを反映し造られ、それらの建築物は次第に建築主の人間性を表していくのだと私はライトの言葉をそう解釈した。

私は幼い頃からたくさんの本に親しめる環境にあった。夜は決まって絵本を読んでもくれる声と共に心地良い空間の中で眠りについた。そんな私も小学、中学と年齢を重ねると大好きな本を求めるのと同様に建築物に興味をもつようになった。その当時の私の中の心地良い空間とはまさに図書館だったこともあり、街の小さな図書館から絵に描いたようなデザインに拘る素敵な図書館、それから天井を見上げる程の圧倒的な広さを誇る大きな図書館にまで足を運んだ。図書館へ足を踏み入れるといつも違った世界には入れた。気持ちが落ち着くと共に心地良い空間の中で大人の仲間入りをした感覚になれたのだった。

建築物は嬉しい時も悲しい時も、そして特別な時間を迎える時も側で寄り添い見守ってくれることを知っている。私の祖父は数年前に癌で余命を宣告された時、迷わず自宅に帰ることを選んだ。当時、中学生だった私は入院を続けて治療してほしかった。どうしても生きてほしかったからだ。祖父がなぜ自宅に帰ることを選んだのか理解できなかった。しかし、この答えは祖父が亡くなってから気づくのである。祖父の家には未だ祖父の温もりを感じる。祖父と遊んだ階段、晴れた日は遠くの山まで見渡せたベランダ、居間の柱には幼い私の身長が刻まれている。あの時、自宅へ帰ることを選んだ祖父の想いがこれらの場所に刻まれ、形として残っていたのだ。祖父の家を支えているのはただの木材ではなく、そこに住んでいた祖父の想いが十分に染み込み、現在も家族によって引き継がれていることを知った。すなわち、祖父は自宅で最期を迎えたかったのではなく、心地良い場所、空間の中で命ある限り生きたかったのだと思う。

最近、長崎県の軍艦島がテレビで取り上げられていたのを目にした。明治時代から昭和にかけて海底炭鉱によって栄え、日本初の鉄筋コンクリート造の高層集合住宅が建造されたことで有名だ。私は中学の時、長崎県を旅した際に様々な建築物に触れる機会を与えてもらった。軍艦島においては、人が住むには不便なのではという思いのほうが行先した私だったが、かつての住人たちは隣人との近い距離感さえも快適な幸せな日々だったと声をそろえて言ったというのだから驚きだった。しかし、むしろあの狭い土地にあのような建築物だったからこそ人々が心と心を通わせることができ、強い絆で繋がることのできたのかもしれない。

私の兄も建築に携わる仕事に就いている。建築に興味を持ったきっかけは違うが、兄の仕事に向き合う姿勢だったり、建築に携わる楽しさや建築の奥深さを知っている兄の存在が今の私を後押ししてくれているのは間違いない。

建築の魅力は人の為に創造すること。そして、私の祖父やかつて軍艦島の住人が感じたような心地良い空間を造ることである。私は、心地良い空間という建築の魅力を伝えていきたい。





優秀賞

幸せを造る仕事

こいぬま りん な
鯉沼 凜凪 [栃木県立宇都宮工業高等学校 建築デザイン科 2 年]

私が思う建設産業の魅力は、色々な人達を「幸せ」と感じさせることができるという点だと思っています。この感情は、建物造りに関わった人、その建物を使っていく人、どの立場からでも感じるができます。

私は、建設の魅力は初めて引っ越しをしたときに感じました。家族から新しい家を建てるという話を聞かされた時、今まで住んでいた家が好きだった私はショックを受けました。両親と一緒に現場を見に行った時、職人の方々が緊張感のある現場でとても元気に、楽しそうに作業をしているのを見てとても不思議でした。見ただけで汗が出てくるような暑さの中、大変な仕事をしているのに何であんなに楽しそうに仕事ができるのだろうと思っていました。しばらくして、家が完成しました。家族全員で完成した家を見に行きました。家を見た瞬間、心の底から今まで感じたことのない感情が湧き出てきました。今でもその時の気持ちを鮮明に覚えています。前までは、新しい家に気が進まなかった私が、家の迫力、家の中の温かい雰囲気、木の心地よい香り、手触りの良い壁や床、すべてを一気にいろいろな感覚で感じ、感動し、家が好きになりました。そこで私は、一つの建物だけで人を「幸せ」にさせることができるということに気付かされました。その時やっと職人さんたちが楽しそうに仕事をしていたのが理解できました。この気持ちは、自分の美術の作品を見てもらった時に感じるものに近いのではと考えました。美術では、自分のイメージを試行錯誤しながら形を作って、完成したものを最後、誰かに見てもらい、「すごいね」「このアイデア好き」などの言葉をもらってとてもうれしくなり、そして自然と周りも温かい空間になり好きでした。私は、自分が考え、作ったもので、顔も声も知らない誰かでも、建物を通して幸せにすることができる仕事はとても尊いものだと思います。しかし、女性という性別では、建設業に魅力を感じる人は少なく、周りの女の子たちは、「パティシエ」や「看護師」などといった、女の子らしいと言われる夢の人ばかりで、「家を作る人になりたい」というのは少し怖くて言えませんでした。その時もまだ、工業関係で活躍する女性の方は少なく、自分には無理なのでは、と思ってしまっていたことがありました。しかし、多くの魅力がある建設業をあきらめたくありませんでした。そこで私はこのことを周りの人に言うのと肯定的な答えが返ってきて改めて建設業というものは、誰から見ても魅力を理解してもらえるものだ実感しました。

建物は、建てて終りではなく建て終えてからも、毎日を安全に楽しく、いつもどおりに過ごすために不可欠な存在です。毎日の生活では普通のこと過ぎて、魅力を感じない人もいるかもしれませんが、そのいつも通りに楽しく生活できる土台には建設業というものが関わって来ます。いつも通りの幸せを造るといふ強い魅力をもっていると思います。





優秀賞

感謝してもしきれない

いしい あきと
石井 彰翔 [千葉県立京葉工業高等学校 建設科 3年]

私が思う建設産業の魅力は人々を笑顔にできることだと思います。建設産業は私たちにとって欠かせない存在だと思います。私たちにとって欠かせないのが水、電気、ガス。これらの存在は建設産業の人たちがいるから今の私たちの生活があると思います。この建設産業の人たちには伝えられないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。

東日本大震災は、日本人に恐怖と絶望の日々をもたらしました。東北で育った当時の私はまだ幼稚園にもいけなかった幼子で、当時、その大災害の10分の1もわかりませんでした。その世界の10分の1も知らない幼子には東北地方太平洋沖地震なんてまったくわからなかったのです。だがまだ幼かったとはいえ今、何が起きているかは一目瞭然でした。外に出てみると家は崩落し地面は割れ、車は大破し、人々は恐怖と絶望のどん底に落ちたような悲鳴が四方八方に聞こえ最悪な気分でした。でもそれよりも最悪なのがすべてを飲み込む津波で私たちは避難所で一夜を過ごしました。そこでは津波の被害で集まってきた人々が集まっていたのです。その避難所ではガスや電気、水が使えなくて人々が困っていたところ、全国から集まった建設作業員の人たちが来たのです。当時の私には救世主が降臨されたとは思いませんでした。その建設作業員の人たちが来てみるみるとガスや電気、水など私たちにとって欠かせないものが復旧したのです。私たちにとって欠かせないものが復旧し、私の周りの人々が笑顔で溢れかえていたのです。私も笑顔で心が温まった事を今でも覚えています。今、「私は猛烈に感動している。」と。そこで決意したのです。私は建設業のこの人たちみたいな人たちと一緒に仕事をしてみたいと。人々の笑顔をもう二度とどん底に落とさせないようにすると決意しました。そしてその人たちがいて今こうやって文章を打っている私。改め、石井彰翔がいます。私はもう一度言います。この人たちに祝福があらんことを。

感謝してもしきれないという私がいます。そしてこの前書いたように建設産業の魅力は人々を笑顔にできる。いや、していると私は思います。実際に私、同様、周りの人たちが笑顔に溢れかえたからです。私はその考えを踏まえて将来は人々の役に立ち、笑顔で溢れさせて社会の一部になりたいと感じたのです。

将来私はクレーン関係に携わる仕事に就きたいと思います。そしてこの東北地方太平洋沖地震みたいな大きな災害が起きても迅速に動けるような将来の自分になりたいと大きくなった私は今思っています。今よりもっと大きくなって将来奥さんができて、奥さんに自分がしたことを自慢し、息子か娘が出来たらその子達にも自慢をし、娘、息子が大きくなったら自分がしてきたことを娘、息子にやってほしいしこの子たちには、人々を笑顔にできるようなことをやってほしいと高校生の自分がこうやって文字を一生懸命打って夢に浸っています。





優秀賞

たくましい存在

にし だ じゅん
西田 潤 [金沢市立工業高等学校 土木科 2 年]

私が思う建設業の魅力とは、地図に残る仕事だと思う。今こうして生活しているのも、誰かが何かをしてくれているから生活ができています。建設業の仕事は「ダサイ」という印象があるかもしれない。しかし、私はダサくないと思う。いや、むしろカッコいいと思う。人には必ず家族がいて、守る権利がある。

しかし建設業の人たちは、交通状態や効率などを考えて夜間に作業をすることをよく見かける。その人たちは、自分の時間や睡眠時間を削ってまで、社会のため、そして人々の生活のために汗水を流している。その一滴の汗は、きっと誰かの流す一滴の涙を防いでいるのだろう。夜間、誰も見ていない中で一生懸命働いている姿は誇りに思うべきことだ。気づけば、道路がきれいになったり、新たな道ができたりしているが、それは現場の人たちだけではできない。設計する人、管理者など、数えきれないほどの裏方の仕事もある。その方たちがベースとなり、成り立っているのだ。

また、機械等を使う場合もある。一つのミスが大きな事故につながる。一つ一つが緊張に包まれている。そのような緊迫した中で必死に働いている人はカッコいいと思うのが、建設業の魅力だと私は思う。

一方、元日に襲った令和6年能登半島地震。他県から様々な救急隊や自衛隊などが助けに来てくれて、数多くのニュースになった。しかし、そのニュースには建設業の方々のことが映されていなかったと思う。救急隊や自衛隊の車両が通れるのは、土木関係の人たちが一人でも多くの命を救うために道を切り開いてくれたからだ。土木の人も人を救っている。誰も知らないところで、命を救うために頑張ってくれたのだ。

授業の現場見学では、道路を作る最初の段階を見せていただいた。そこで、重機を動かす場面で現場の人が笑顔で「乗ってみるか」などと言ってきて、本当に現場の人はフレンドリーな人が多いと思った。また、重機を動かしているのを見て、一人一人で大きなものを操ることができるのは、本当に建設業の人以外にはできない仕事だと思った。当たり前のように歩いている道路も、作ってくれて管理もしてくれている。限られた時間やお金などを考慮しながら作業をこなすのは、素人にはできないプロの技術であり、そのようなことを称える必要があると考えた。

このようなことを踏まえ、建設業とは生きる上でのベースとなっており、自分たちが知らない場面で多く助けてもらっている、欠かせない存在だと私は思う。建設業には様々な魅力があり、自分としては汗を流す姿がかっこよく、憧れる存在となっている。





優秀賞

暮らしを「変える」建築： 最新技術と私の創造で描く未来図

いわさき とうま
岩崎 柊磨 [静岡県立天竜高等学校 総合学科 建築系列 2年]

私が建築に憧れたきっかけは、祖父の存在だ。幼い頃、祖父はいつも家でパソコンに向かいCADを操作していた。最初は画面に映る複雑な線や記号にあまり興味がなかった。しかし、祖父の部屋で遊ぶ中で、その真剣な横顔や、図面が画面上で少しずつ具体的な形へと『創造』されていく様子を間近で見ている。そして、祖父から『この線一本が、家を支える大切な柱になるんだ』といった話を聞くうちに、私の心の中に、建築が持つ未来を形にする力への静かな興味が芽生え始めた。時には祖父の仕事についていくこともあり、私にとって建築は身近な存在となっていく。

私が初めて建築に深く触れたのは、高校の体験授業でのCADやBIMとの出会いだった。最初は操作に戸惑い苦戦したが、仕組みや操作方法を理解するにつれて、その計り知れない面白さに引き込まれた。パソコン一台で、複雑な建物の設計が、『こんなにも効率的に、そして正確に』できてしまうことに、私は驚きを隠せなかった。手作業で時間をかけて描くものだと思っていた製図が、瞬時に形になる様子は、技術の驚異的な進歩を目の当たりにする瞬間だった。CADやBIMが建設産業の未来を大きく変え得るという、尽きない興味が湧き上がった。

しかし、CADやBIMの体験授業では、その操作を覚えることが想像以上に大変だった。一つでも操作を間違えると、後でミスに気づいても修正が難しく、何度も壁にぶつかった。私にとってこの複雑な操作を完璧に習得することが最大の課題だった。だが、この課題や困難に直面し、努力する中で、私は最新技術を扱う上での『責任』と『こだわり』の重要性を深く理解した。そして、CADやBIMを通し、建築に必要な技術だけでなく、プロとして常に心がけるべき細部への配慮と、技術を正しく使いこなす責任感を改めて確認できたのだ。これは、建設産業の未来を担う者として不可欠な姿勢だと強く感じた。

私が建築の道で目指す具体的な目標は、まず二級建築士の資格を取得することだ。私の夢は、建築士として、様々な建築物を創造すること。そして、ただ建物を建てるだけでなく、その建物を通し、人々に建築の持つ『素晴らしさ』や『面白さ』、そして『自分で考え、作り上げる楽しさ』といった、私がCADとの出会いで感じた感動を広めていきたい。建築士の資格を取得できれば、バリアフリー設計など、高齢者や子育て世代といった多様な人々の暮らしを豊かにする『次世代の建物』を積極的に手掛けたい。これこそが、私が描く建設産業の未来であり、私の将来の具体的な貢献の形だ。

私の未来、そして人々の暮らしをより豊かにするため、私は今できることに全力で取り組んでいく。具体的には、日々の授業に一層真剣に向き合い、特に建築の専門科目にはこれまで以上に力を入れる。これは、最新の建築技術を深く理解し、未来の建物を創造するための基礎を築くためだ。将来はBIMやAIといった最先端技術も積極的に学び、人々の生活を今よりもさらに豊かに、快適にしていける建物を建てていく。私が建築士として創造する建物が、安心して暮らせる『未来の生活空間』となり、ひいては世界へも貢献できるよう、建設産業の新たな時代を築くため、建築を通して世の中を、そして人々の未来を、『創造』していくことを、ここに強く決意する。





優秀賞

家族と紡いだ暮らしのカタチ

う え だ ま あ や
植田 真綺 [静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年]

建設産業との関わりを振り返ると、印象に残っている出来事が二つある。

一つ目は、自分の家が建った時のことである。今住んでいる家は、大工である父が、小学生の頃に建ててくれたものである。通学路の途中に現場があったこともあり、私は学校の帰りに現場に立ち寄っては、少しずつカタチになっていく家の様子を見るのをとても楽しみにしていた。柱が立ち、屋根がかかり、窓がつき、空間がだんだん部屋へと変化していく。その一つひとつの変化に期待がふくらみ、新しい家での暮らしを想像し、胸が高鳴ったのを覚えている。

二つ目は曾祖父母の家の建て替えに関わったことである。この家は大工であった曾祖父が建てたもので、築57年が経った今、少しずつ老朽化が目立つようになってきた。そこで、孫である父の下に建て替えの依頼がきた。高校で建築を学んでいる私は、父と一緒にプランを考えることになった。曾祖母は縁側にいることが多く、自分で育てた庭の花を眺めたり、時には庭仕事をする曾祖父にお茶を出したりしていた。曾祖父母の思い出がたくさん詰まった縁側をなんとしてもカタチに残したい。平面図のデータ作成を任された私は、この家の縁側の役割を考えながら取りかかった。曾祖父母から祖父母、父、そしてひ孫である私まで、何世代にもわたってたくさんの思い出が詰まった家。そんな家の新たな一ページに私も携わることができたのは、建築を学ぶ者としてだけでなく、一人の家族としても大きな意味を持つ出来事であり、とても感慨深く、忘れがたい経験となった。

この二つの出来事を通して、何十年にもわたり、使う人々の時間や思い出を積み重ねながら、カタチとして残り続けていくことが、建設産業の大きな魅力だと感じた。自分の家が建つ様子を見た時の心踊る気持ちや、曾祖父が建てた家の建て替えに関わった経験は、まさにその魅力を実感する瞬間だった。建物は、ただの物理的な構造物ではなく、誰かの暮らしにそっと寄り添い、日々の何気ない時間や思い出を包み込んでくれる存在だと思う。建設とは、目に見える構造をつくと同時に、人の思い出やつながりなどといった、目に見えない価値を生み出す営みでもある。建物そのものだけでなく、それができるまでの過程や関わった人々、さらにこれからそこに関わっていく人々の思いも含めて、建設には深い存在意義と大きな価値がある。だからこそ、使う人の立場に立ち、長く愛され続ける空間をつくるのが大切だと感じている。

私は将来、自分自身が体験してきたような、人の記憶に残り、心までも動かすような空間をつくっていきたい。心を動かす空間をつくるためには、図面上だけで考えるのではなく、実際にその空間で過ごす人の暮らしや思いに目を向けることが大切だと感じた。学校で学んだことを、身の回りの建物や空間に重ねて考えることで、図面の向こうにある「暮らしのカタチ」を想像する力を育んでいきたい。建設は、ただ建物をつくるだけでなく、人の暮らしや心と深く結びつきながら、共に時を重ねていくものだ。これこそが、私が建設産業に惹かれる一番の理由である。





優秀賞

私の描く未来 -人と人をつなげる建築のかたち

こばやし みこ
小林 美心 [静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年]

「自分で住宅を設計してみたい。」当時の私の夢はそんな漠然としたものだった。私が建築に興味を持ったきっかけは、中学1年生の頃元々住んでいた家を建て替えし、新築にしたことだった。住宅会社について考える中で住宅展示場に一緒に行ったり、様々なモデルルームを見たりすることが、すごく楽しく毎回ワクワクとしていた。さらに自分でどんな家がいいか間取り図を書くようになり、自分が建築に興味があることに気がついた。そして、自分で建物を設計してみたいという夢を持ち、現在の工業高校に入学した。

私は、入学してから製図の課題や、様々な建築コンペに取り組む上で多くの建物を設計し、模型を作り自分の建物を実際にものとして作ることができた。そうした建築漬けの毎日を送りながら、私はこれからどんな建物を設計したいのだろうと自分の建築観を考えるようになった。そんな中でこれからの自分が何をつくりたいのが明確になる出来事があった。それは、去年の年明けに起こった能登半島地震だ。私のこれまで生きてきた17年間でそれは最も衝撃的な出来事であった。特に、地震によって、あるビルが根元から倒壊したという報道は、私の心に大きな衝撃を与えた。高校に入学し建築を学び、建物というのはそこに住まう人の生活を支え、快適さを提供するものだと学んだ。しかし、この報道を見て、建物自体の強度や地盤が弱いなど問題があると、時に建物が人を殺めてしまうこともあると知った。だから、建物はそこに住む人を守るために頑丈でなければならぬし、災害が起きた時、建物があるということの安心感が必要であると強く感じた。そして、建築には「そこに住む人々の命を守る」という、極めて重要な使命があると学んだ。さらに、被災後の生活には、建物だけでなく「人とのつながり」も大切であると感じた。物資が不足し、不安や孤独を感じる状況では近隣住民同士の支え合いが心の拠り所になる。そうした支え合いを可能にするのが「コミュニティの力」である。災害に強いまちづくりには、建物の耐久性だけでなく、人と人との信頼関係を築ける空間設計が不可欠だと感じた。そして災害が起きた時に助け合うのではなく、普段から人と人が繋がり合うことのできる環境を建設産業に携わる私たちが築くべきだと思う。コミュニティは平時には安心感を、非常時には生存の可能性を与える不可欠な存在なのだ。

私は、能登半島地震をきっかけに、「人と人をつなげる建築をつくる」という明確な夢を持った。人々が集まることで、日常では安心を、非常時には助け合いを生む空間をつくりたいと思った。特に、私の住む静岡県では南海トラフ地震の発生が懸念されていて、防災意識は身近な課題である。したがって、地震に対する知識を深め、コミュニティを育む建築を設計し、地域と深く関わり、人々が安心して暮らせる街づくりに貢献したい。それが私の描く未来だ。





優秀賞

建築で歴史に感動を刻む

さいとう こうし
齋藤 光志 [静岡県立浜松工業高等学校 建築科 1年]

私の将来の目標は、建築を通して世界の人々に感動を与えることだ。どの国に生まれた人にも、「こんな家に住みたい」と思ってもらえるような建築を届ける。その家が、その人にとって生涯忘れられない存在になってほしい。私にとって建築とは、国境や文化の壁を越え、人の心を動かす力を持ったものだ。その理想を実現するために、私は建築科に通い、日々学び続けている。

将来、私は建築士として、発展途上国に最先端の住宅や施設を建てたい。暑さに苦しむ地域には風が通り抜ける仕組みを、雨季には水をはじかえす屋根を、素材は現地の木や土を使い、そこに日本の緻密な構造技術を掛け合わせて、美しく、機能的で、心地よく、そして安心して暮らせる家を作りたい。また、その国の技術レベル、ニーズ、経済状況など、現地の適正技術を考慮し、持続可能で効率の良い建築を広げていきたい。

そして、その土地に生きる人たちと共に悩み、学び、喜び合いながら、文化や気候に根ざした住まいを一軒ずつ丁寧に建てていきたいと思っている。言葉が通じなくても、図面と熱意があれば心は通じると信じている。

私が世界に挑戦したいと思うようになったのは、昨年のニュージーランドでのホームステイがきっかけだった。そこでは、日本の文化が大好きな方が住んでいて、家の中に宗派関係なく仏像や鳥居が建っていた。他にも、大きな窓から自然を取り込んだりするような、日本では見られない自由な建築が暮らしに根付いていた。「こんなに自由でいいんだ」と衝撃を受けると同時に、日本建築の繊細さや安全性へのこだわりにも改めて気づかされた。だから私は、その両方の良さを融合させた、誰も見たことのないような建築を自分の手で創り出したいと思うようになった。

この実現のため、高校生の私にできるのは、設計コンペに挑戦したり、建築雑誌の図面を読み込んだりして、自分の感性と技術を磨くことだ。そして、大学では建築についてもっと深く学び、それ以外にも、海外の地域文化について学びたいと思っている。

今、私に必要なのは完璧な英語力ではなく、目の前のチャンスに飛び込む行動力である。その行動力を身につけるためには先生や先輩にたくさん質問し、どんな状況でも臨機応変に対応できる柔軟性や、知識をつけたい。建築という同じ目標を持つクラスの仲間と一緒に、図面を描き、技術を身につけて、建築から受け取った感動や驚きを、より多くの人にも共有できるような、そんな建築家を目指している。建築を通じて、人の幸せと感動を築きたい。





優秀賞

インテリアが日常を特別にする

すずきのあ
鈴木 希彩 [静岡県立浜松工業高等学校 建築科 1年]

私の夢は、何気ない日常を特別にする空間デザイナーになることだ。私が空間デザイナーに憧れるようになったきっかけは、日常の中にある些細な気持ちの変化だった。私の家族は小さい頃から、いろいろな場所に連れて行ってくれた。そのおかげで、自然や地域、様々な建築物、それに伴ってたくさんの空間に出逢ってきた。どの場所も空間も、同じ感覚を味わうことはなく、その場所、時々で違う良さがあった。

しかし、私が一番心を動かされた空間は自分の家だった。私の祖母は花や雑貨が大好きで、家はたくさんのお花や雑貨で溢れている。ただのキッチンがちょっとした装飾品によって、温かみのあるキッチンになる。階段の縁や、テレビ台の小さなスペースに雑貨を飾ることで、その場や心が和む。お花を所々に飾ることでやわらかい雰囲気になり、季節感を味わえる。浴室にフェイクグリーンを飾ることで、坪庭との一体感が得られ、外の繋がりが感じられる。幼い私には祖母が魔法使いだと勘違いしてしまうほど、一瞬で特別な空間に変えてしまったのだ。

ところがよく考えてみると、私は何も気づいていなかった。ただその空間にある「もの」の配置や付加されたことだけしか目にしていなかったのだ。ある日、窓から差し込む光に驚愕した。太陽の光と開口部によって作りだされた室内空間の陰影こそが、そこにあるものに注目させ、祖母を魔法使いにしていたのだと。朝にはダイニングにそっと入り込む優しい光が、昼にはリビングに活力を持たせてくれる強い光が、そして夜には室内を灯す淡く静かな柔らかな光が、私のことを見守り一日を彩ってくれた。生活スペースや、装飾品、窓の位置など、少しの工夫で特別な空間になる、そこに私は空間の魅力を感じた。建築や空間が人に与える影響には無限の可能性が秘められている。私は装飾品で魔法をかけるだけでなく、一から自分で作り上げた設計によって特別な場所、空間を演出したいと思うようになった。

私は、将来、人々が求めていることを形にし、癒しや心の拠り所を与える空間デザイナーになる。今まで五感で感じてきた、目には見えない空気感や、心を動かす想いや感情を、目に見えるかたちすることを目標かつ、大切にしていきたい。技術がどれだけ進歩し、時代が変化していったとしても、「建築や空間がどう人に寄り添うか」を常に問い続け、新しい考えを見出せる存在でありたい。そしてそれが、これからの建設産業や時代に必要とされる空間デザイナーの姿である。昔憧れたおばあちゃんを越えて。





優秀賞

感謝の恩返し

橘 美優^{たちばな み ゆ} [愛媛県立松山工業高等学校 土木科 3 年]

建設機械が奏でる音色、コンクリートの独特な匂い、自分の世界に飛びこめる測量、技術者が新しい命を吹きかけた道路や橋。私は建設業界の新たな風を作る大黒柱になりたい夢がある。現在、土木・建築の女性技術者が多く活躍されている。しかし、インターンシップや現場見学会を体験してみると、企業の男女比率は圧倒的に男性のほうが多い。私が掲げたい建設産業の未来は性別、国籍問わず、安心して働ける世界を作ることだ。現実的な未来は、自動化が進みボタン一つで終わると考えられている。人手不足解消に繋がる利点はあるが、私は肌で土やアスファルトを感じたい。もっともっと建設産業に溶け込みたい。好奇心と挑戦が次から次へとやってくるこの世界が私は大好きだ。

建設産業に興味を持ち始めたのは、小学生のころ、壁の舗装工事をしている技術者を見たとき、私も人類を支えることをしたいと強く思った。また土木関係の仕事をしている父の姿に憧れた。高校では普通科高校では味わえない、多くの体験や出会いがあった。専門的分野を高校のうちから極めていける環境が整えられていることに感謝の気持ちでいっぱいだ。たくさんのご縁があり建設産業の道に進むことができています。私はこの先、建設産業の勉強をたくさんして多くの資格に挑戦し道を作りたい。永遠に続く道には必ずしも壁が訪れる。自分の人生は自分にしか作れない。だからこそ失敗も経験につなげて楽しみながら建設産業でなくてはならない存在に成長していきたい。途切れない道の先には、建設業の仕事を起業し、女性技術者として世界を飛び回っていきたい。土の匂いから始まるたくさんの発想が私の身体を奮い立たせている。どんどん舞い降りてくる夢と希望。それに対する不安と葛藤。当たり前の生活を与えてくれていることに感謝。次は私が今まで与えてくれた美しい世界を恩返ししたい。

建設産業の未来は、近い存在でもあり遠い存在でもある。世界では、災害による被害や異常気象による被害が多くある。大切にしていた道路や橋、建物が一瞬として崩れてしまう。世界の扉が開いた日から今日という日まで、人類が何度も何度も研究をし再建を繰り返してきた。人と人との交わりで繋ぎ、魂込められた力強い地。未来の可能性は無限大と言われているこの世界で、全ての方々のために私は改革していきたい。セメントの私は、まだまだコンクリートになれない。厚い信頼関係をたくさんの方々と築いていき、誰もが認める建設業界の大黒柱になる。建設産業という素晴らしいものを私に巡り会わせてくれたこの世界に感謝の気持ちをこの作文で伝えたい。私の未来は、この世界にたくさん感謝の恩返しをしていきたい。当たり前を送れている青春に感謝を込めて。





優秀賞

私が思う夢や目標

りゅう あや な
龍 絢菜 [福岡県立八女工業高等学校 土木科 2年]

私が工業高校の土木科に入った理由。それは、夢が無かったから。土木科に入る人の多くは、「地図に自分が作った建造物を残したい」などの土木に対する思いがあると思う。しかし、私にはそんな大それた思いはなかった。

そんな私が「土木」に興味を持ち始めたきっかけは、工業高校の体験入学で行った、セオドライトを使ったトラバース測量だった。私は、「測量」というものをまったく知らない状態で、セオドライトという器械を見て、「これは何をするための器械だ。」と頭が疑問に思っていたことを今でも思い出す。今、この時のことを思い出すと、疑問に思ったことが、測量に対する興味が芽生えた瞬間だと思う。セオドライトからボールを視準しているときに、これは何をするために必要で、この動作は意味があるのだろうかという疑問を当時の高三の先輩に質問してみた。その先輩は「なんだろうね、セオドライトで測ることで、地形がわかるし、地形が分かることで、どのようなところに問題があるかが測ってから分かるし、防災マップを作るときに役立っているから意味はあると思うよ。」と教えてもらい、測量というものに魅力を感じた。そして私は八女工業高等学校に入学することを決意した。入学して測量のことについて学ぶと、色んな種類の測量があり、どんな測量にも意味があることを知り、学ぶにつれ、胸が踊るように感じた。初めての実習のときに実践に測量機器を用いて行うときに、やっと測量へのスタートラインに立ったように思い、そこで初めて、測量を仕事にしたいという夢ができた。

測量を一言で例えると、「生活を支えるのに必要不可欠なもの」だと私は思う。生活を支えるものが無くなると、今まで当たり前のように行えて来たことが当たり前では無くなるということになる。「当たり前が当たり前では無くなる」ということを想像できない人が多くいると思う。それだけ、「生活を支える」ということがどんなに必要不可欠なのか身染みて理解できていないことがわかる。そのようなことを私は将来、仕事にしたいと思うならば、尚更理解しなければならないと思う。それと比例して、生活施設を利用している人たちの命のことも考えなくてはならない。毎日、勉強をしている中で「命」について考えながら学んでいるかと問われたら、「考えていない」と答えるしかない状態だった。ただ単に、「測量をしたい」と思うだけではこれから先、私はその就職につけないと思う。本気でその夢を叶えたいのならば、日々の生活から、気持ちや行動を改めていかないと、と思う。それらを私は成し遂げ、これから先の未来の生活を支えられるような人間になりたい。





優秀賞

暮らしと心をつなぐ建築

おかもと
岡本 ひかる【熊本県立熊本工業高等学校 建築科 1年】

嫌なことがあり落ち込んで帰ってきた日、家のドアを開けると、壁一面に昔好きだったアニメの一場面や、家族や友達の写真が飾られている。心がざわつく日でも、馴染みのある空間がそばにあるだけで、気持ちが少しホッとするような気がする。

最近では、照明やカーテンをスマホで操作できる家も増えてきた。もしそれがもっと進んで、気分に合わせて部屋の色や明るさが自動で変わるようになったらどうだろう。朝は元気をくれる色、夜は落ち着いた光に包まれる。そんな住まいがあれば、毎日が今よりもずっと過ごしやすくなる気がする。

ヨーロッパの認知症高齢者施設では、「住んでいた家に近い環境」を大切にしていると知った。日本では安全を重視して物を減らす施設が多いが、それがかえって利用者の不安を強めてしまうこともあるという。見慣れた家具や写真、馴染みのある色があるだけで、人は安心感を得られる。建築には、そんな心のケアをする力があると思う。

また、色が人の気持ちに与える影響も大きい。赤は元気をくれ、青は落ち着きをもたらす。発達障害のある子どもたちは、色を感情と結びつけて感じる人が多いそうだ。デンマークの支援施設では、気分にあった部屋を自分で選べるようにすることで、落ち着いた行動や笑顔が増えたという。

こうした事例を知るにつれて、「建築はただ建てるだけでなく、人の気持ちとつながるもの。」だと感じるようになった。素材や配置だけでなく、暮らす人の心に目を向けた設計が、これからの建築には必要になると思う。

だから私は、模型作りや設計の技術を学べる工業高校の建築科を選んだ。将来、必ず建築家になると決めているわけではないけれども、好きな模型作りを通して建築に関わっていきたいと思っている。形だけではなく、そこに住む人の気持ちに寄り添う空間をつくれるようになりたい。

今建設業界では、大工のなり手が減り、建設業界の技術者が足りなくなっている。また、建材の価格も上がり、必要な材料が手に入りにくいこともあるそうだ。だからこそ、できるだけ安価で、安心して長く住める家づくりが、これからはますます大切になっていく。たとえば、有名な建築家・隈研吾さんの作品は、木や光を上手に使い、とてもきれいなデザインの建物で、世界中から高く評価されている。一方で、中には「見た目はとても魅力的だけれども、メンテナンスの難しさを感じることもある。」という声もあるそうだ。このことから、建築には美しさと同時に、丈夫さや使いやすさについてもバランスよく考えることが大切だと感じる。

これからの建設産業には、新しい技術やデザインだけでなく、人の心の動きや日々の暮らしに寄り添う視点が求められる。そして、それを無理なく、できるだけ安く、現実的に実現する工夫も必要だ。

その上で、誰にとっても「ここで暮らしたい。」と思える家。そんな住まいがあれば、日々の気持ちも和らぎ、安心して過ごせるようになると思う。私もいつか、そんな場所を形にする手伝いができたらうれしい。



MEMO

